
デウス・エクス・マキナは必要ない

絃城恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デウス・エクス・マキナは必要ない

【Nコード】

N8338V

【作者名】

絃城恭介

【あらすじ】

世界に決まったストーリーは必要ない。誰の人生も等しく自分のものだから。それでも、デウス・エクス・マキナは最後の最後で都合のいい物語に変化させてしまう。

デウス・エクス・マキナは必要ない。物語は俺達が最後まで創り上げるものだから！！

プロローグ（前書き）

子供の頃はよく御伽話のようなものに惹かれたものだった。

その中でもよく記憶に残っているものは『ジャバウォックの詩』と呼ばれる英語で書かれた最も秀逸なナンセンス詩であると言われるものだ。

その作中ではジャバウォックという正体不明の怪物が名乗りを上げるような名前すら無い主人公によって打ち倒される。その時考えた事は簡単な疑問だった。

何故正体不明の怪物を主人公は打ち倒す必要があったのだろうか？

幼い子供の心中に浮かび上がったその些細な疑問は疑問ともいえないようなものだろう。それに、そう疑問に思ったのなら一から謎解きをするように解決していけばいい。そう思っていたものだ。

だが、結局その疑問に対する答えは幼少の自分には見つけることができなかった。

尤も、『今でもその解を探しているか？』と問われれば間違いなく『いや、そんなことは当の昔に忘れてしまったよ』と答えるだろう。

そして、今の自分で昔の自分を納得させられるような言葉は一切持ち合わせては居ない。けど、ただ一言告げるとしたらこんな言葉にしてみようと思う

”機械仕掛けの神は必要ない”

この世にご都合主義なんてありえないんだと、そんな意味を含めて
皮肉気と言ってやるとしよう。

それを”僕”が言うのもおかしい事だと思っけどさ

プロローグ

週末、金曜日。

平日の終わりを淡々と迎える学生にとっては休日を迎えるための準備期間でもあると言える。もっとも、この定義は前文で述べたように多くの学生にとっての定義だが……

そもそものところ、金曜日の放課後と言うものは碌ロクな事に出会わない。先々週の金曜日にはぼんやりしたまま横断歩道を渡ったところで信号無視をしてきた切る間に跳ねられかけるわ、先週の金曜日には駅のホームから突き落とされたりと……まあ、どれも命に関わる事ではないから”不幸だ”程度にしか感じては居ないんだがね

そして、今日の金曜日と言う日はというと……

「はあ、コレだからDQNは嫌なんだよ」

「ああんっ！？ 何言ってるやがるんだテメエは、アアッ！！」

ご想像の通りにDQNに絡まれている、と言うよりも巻き込まれた。しかも駅横の公園で……ああ、めんどくさい

「まず人とまともに会話をしようって思うような奴は制服の首襟なんかを掴んだりしないんだよ。コレだからDQNは」

「あの、助けてもらえるのは嬉しいんですけど……それは火に油を注ぐような事だと思うんですけど……あははははは」

「聞いてんのかゴリアー！！」

今人様の言葉を遮って発言した少女が現在の状況に俺を陥れた張本

人である。

「それ以前に助けるも何も、アンタのせいで誤解されてるんですけど?」

「……………あはははは、ふう。面白い冗談ですね、それ」

「ねえ、殴つてもいいですか? 殴つてもいいですよ? むしろ殴らせてください」

「おうおう、無視か? この状況で無視かゴラアツ!?!」

もつとも、その張本人は殴つてやりたいほどに人を馬鹿にした表情でこう言っているのだがね

「嫌ですよお、殴られたら痛いですもの」

「たった今殴られそうな俺に言う言葉ですか!?!」

ダメだコイツ……………今、俺の首襟掴んでいるDQNよりタチが悪い

「舐めやがってツ、ぶつ殺してやる!!」

「つて、ほら。殴りかかってきたじゃんかよ」

「死ねやゴラアアア!!」

目の前で大きく振り上げられた片腕。この状況で片腕を大きく振り上げたって事はこのDQNは喧嘩慣れをしていない事を意味すると言える。

そもそも首襟を掴んでいる事でこちらの動きには制約が科されているわけなのだから、いくらでも殴る事ができるのだ。それを腕を大きく振り上げると言う事はそれを理解していないのだ。

結論、初めに考えたようにこのDQNは喧嘩慣れをしていないと言

うことに至る。

「ッ、受け止めやがった!？」

「おお、凄いです!!」

つまり、初動から全てを見切れるのだ。

だから目の前に迫ってくる拳だって簡単に掴む事もできるし、首を少し動かすだけでも回避する事もできる。もっともこの状況では首を動かせないので拳を掴むような事になったのだがね

ちなみに足も動く

「で、まだ続けるのかな？ 俺としてはそろそろ疲れてきたんだけどなあ」

少し眼光を細く鋭くし、威嚇するように相手の目を見つめる

そして二度目の結論。俺としては一刻も早くこの状況から脱出したい。そしてこの状況に俺を巻き込んだ少女を一発殴りたい。だからこの首襟を掴んでいる手を離してもらいたい

「ち、チクシヨー……覚えてやがれ!!」

「覚えていてもいいのかい？」

「わ、忘れてくださいい〜!!」

一目散に逃げていくDQNを尻目に見ながら、すぐさまこの状況に俺を巻き込んでくれた少女の方をがっしりと掴む

「さ、経緯いきわたりを全て話してもらえるかな？」

「え、そんな強引な…女の子とそういうことをしたいって言うのなら雰囲気ですな」

「どうしたらそういう話になるんだか……」

そしてリリースした。そして駅に向かって何事も無かったかのように歩く

「え、ちょ、ええ!?!」

後ろの方で何か驚いていると思ったらこっちに向かって少女は歩いてくる

「え、ちょ、ええっ!?! キャッチ&リリースですか!?! こんな美少女を不良から助けるなんてフラグとかそうそう立ちませんよ!?! もったいないですよ!?!」

「……………」

フラグって……そもそもお前みたいな少女(笑)との間にできたフラグなんてむしろ率先して叩き折りたい。

「無視ですかッ!?! お礼とかしますよっ、私の身体を好きにできるかもしれないですよ!?!」

「……………(お前は痴女か)」

「やっぱり貴方はロリコンなんですか!?! 私みたいな胸がある子はお呼びじゃないと!?! このロリコン!?! いえ、貴方はロリコンではなくペドです!?!」

何より公共の場所でそのような事を言うのは控えて貰いたい。先ほどから道行く人の俺を見る目が痛い。

それにやっぱりってなんだ、いつ俺がそんなことを匂わすような事を言った？

「この変態！！ 分かりました、貴方は私にこんな人のたくさんいる場所で裸体を晒せと言うのですね！！ 私のあられもない姿をこんな場所でさらけ出させて道行く男性にレ プされればいいって言うんですね！！ あ、でもそれも悲劇のヒロインって感じでいいかもしれませんね……………うふふ」

その瞬間、先ほどの比ではない程の視線とざわめきが耳に聴こえてくる

へえ、そんな顔に見えないのにね

やばいって、警察に通報した方がいいんじゃないか？

あれって私達の学校の制服に似てない？

いいのかい？ そんなにホイホイ付いて来ちまって、俺はノンケだって構わずに喰っちまうぜ

ヤ・バ・イ、この状況は非常に不味い。

何がやばいって？ この状況は明らかに俺が世間的に抹殺される状況だ。下手したらブタ箱の中でしばらく生活しなければいけないような状況だ。

しかも帰る家がなくなる可能性も……………くそ、やっぱり金曜日には碌な事が無いな

それに最後の発言はいろいろと関係ないけどヤバイって！！

「ちょ、お前一緒に来い」

「お望みなら此処で犯せばいいじゃないですか　　って、へ？
何処に連れて行くんですかあ!？」
「まだ触つてすらねえよ!？」

手を取る寸前で胸の前で腕をクロスし、胸を隠すような仕草をする
少女……もうわけわからんよ

「じゃあ今から触る気なんですかっ!？」

「つか、何で助けた奴に変態呼ばわりされないといけないんだよ…

…」

「あ………ファミレスでも行きませんか？」

「脈絡がなさ過ぎるんですけど!？」

あまりの脈絡のなさに心の底から突っ込んでしまったのは仕方ない
だろう。むしろ、今の状況で突っ込まない奴がいたら教えて欲しい

「で、コレはどういう状況なのか説明を頼みたいんですがね」

そっぴいながら、先ほど注文しておいたコーヒーを口に含みながら
そう尋ねる。

「あのですねー、ファミレスで美少女とお茶しているんですよ？」
「そうですか……………それで、自称美少女はなんであんな所で絡まれてたんだ？」

「あれ、スルーですか？　そういうのっていいことではないですよ。此処は名前とか聞くとこです。分かっていないですね。」

「聞けばいいんだろ、聞けば……………あんた、名前は？」

「違いますよ、そうじゃないです。まず先に自分の名前を相手に教えてからですよ。」

ヤバイ、マジでウザイ……………だが、此処は我慢だ。頑張れ、頑張るんだ俺

「チツ……………俺は遠、笹宮遠だ。それで、お前の名前はなんだ？」

「キヤー、舌打ちされました。それに”アンタ”から”お前”にランクダウンしました。」

あれ、こいつの制服ってよく見たら俺と同じ学校の奴だ。しかもリボンの色が赤って事は……………同学年

「まあ、いいです。私の名前は羽森結衣と言いますですよ。それで、先ほどの質問なんですけど、”機械仕掛けの神”って知ってますかあ？」

「チツ…本当に脈絡が無い奴だな。”機械仕掛けの神”ってアレの事か？　デウス・エクス・マキナって言うご都合主義の技法で、とても褒められるモノじゃないってことで有名な」

「半分正解で半分間違っています……………まあ、それでいいでしょう。」

「

まるで馬鹿にするかのような表情で見る羽森結衣。本当にいちいち腹立たしいなコイツ

「あーそうかい。それで、それがどうしたって?」

「機械仕掛けの神”は在るべき世界を望んでいます。」

「それで?」

「終わりです」

何を言っているんだコイツみたいな表情でオレンジジュースを飲むな。そもそも、話の趣旨から間違ってるんだろ

「で、どうして羽森はDQNに絡まれていたんだ?」

「それじゃあ、また明日学校で会おうねささみやくくん」

「あ、オイ!! 金くらい置いていけよ!?!」

結局その所は話しませんか……………

「はあ……………帰るかな」

第一章・幻想 その一（前書き）

第一章・幻想 その一

学校、それは俺たち学生が通う聖域。そして勉強と言う名のルールを下に自由を与えられる世界

「それで、遼は疲れていると……それは何処のギャルゲーだい？」

その学校での開口一番、友人その一である今いまが母神奏龍しんそうりゅうは俺に向かって忌々しそうな視線を向けて言い放つ。

「あのなあ、話を聞いてたか。俺は厄介やくがいことに巻き込まれた挙句にファミレスで奢おごらされたんだぜ？」

そもそもこのところ、同情してもらえるなら分かるが羨ましがられる意味が分からない。

「はあ……だか遼は残念なイケメンって言われるんだよ。本人に自覚が無い分なおさら質が悪いよね。それにアレでしょ、遼」「なにがさ？」

嫌な予感よかんはひしひしと感じるが取り合えず言わせて見よう。

「遼つてさ、昔から変な女が好き」
「奏龍……何処でどう聞いたのか知らんがそれは誤解だ。俺は至極普通な女子が好きなんだ」

最後まで言わせきらずに訂正する。そもそも誰が好き好んで”変な女”に分類される人類を好きになる理由が見当たらない。

そもそも今言ったように、俺はごく平凡な普通の女子が好きなのはずだ。

「ふう、最後まで言わせきらない辺り本当臭いけどね」

冷やかすように笑い顔で奏龍は俺に向かって言う。

別にお前に勘違いされるのはいいんだが……その根拠も無いことを平然と言つてのけるその咽は潰したい。いや、むしろ潰させる

「ちよ、なんで無言で咽仏掴んでるのかな遼くん？」

「いやあ、平然とそんなことを言つてのけるその咽は潰しておきたいなつて思つてな、そ・う・りゅ・う!!」

「それは正直だね　　つてこれマジなの、冗談じゃなくてマジなのっ!?!　痛い、痛いって!!」

ギリギリと奏龍の首を掴んでいる手から上の部分に当たる腕に力を加えて死なない程度に持ち上げる。

奏龍はその間に腕をパンパンと叩いて「ロープっ、ロープ!!」と言っている。ちなみにだが何故かその表情は全然苦しそうではない。それを疑問に思い、ふと奏龍の下を見る

「なあ、奏龍……膝の下にあるのはなんだ？」
「ん？ ああ、コレはね椅子だよ」

俺の質問に律儀に答える奏龍。

そもそも、どうして俺はおかしいと思わなかったのだろうか……？
いくら奏龍が細身でも、俺程度の人間が片腕で持ち上げられるはずも無い

「ほう、それで持ち上げられてるのに苦しくないと……」
「まあ、そうなるね」

首を掴んでいた手に一瞬だけ本気で力を込めてからすぐに手を離れた。その瞬間だけは本気で奏龍が苦しそうであったのは言うまでも無いだろう

「うう、げほっ……今の一瞬本気で咽潰しに来たよね」
「さて、何のことだかね」

「まあ、冗談はさておき……遠がフラグ建設したって言う女の子の名前はなんていうのかな？」

先ほどまでの忌々しそうな視線から一変して、面白そうなことを発見したと言う目をした奏龍に質問される。

「えっと、たしか羽森結衣って言ってたような……それとフラグ建設って言うな」

「ゴメンゴメン、ついね……羽森結衣ちゃんかあ、それで何年生なの？」

「なんだ、興味でも出たのか？」

俺が奏龍に向かって質問を返すと、奏龍は笑いながら答えた。

「いやあ、だってそんなイベントあったら気になるじゃん？」

「まあ、どうして疑問系なのかは聞かないでおくとして……俺等と同学年みたいだった。リボンの色も赤だったしさ」

「おりよ、同学年とな？」

そうやって奏龍は額に指を当てて何かを考える仕草をしている。そもそも、俺は何か考えさせるような事を発言しただろうか？

「おつかしいなあー……ねえ、遼。本当にその女の子は同学年なんだよね？」

「本当も何も本人が

あれ？」

そういえば赤いリボンしてたから同学年って思い込んでたけど、アイツは一度も同学年だとは言ってなかったような……

いや、でもそれなら『また明日学校で会おうね』は発言として違和感を感じる。

それに、違う学校の人間に『また明日学校で』なんていうはずが無いし……結論

「……………意味不明だ」

「はあ、突然どうしたのさ？」

その問いに答えを返そうとした瞬間にHR開始を告げるチャイムが鳴り響く。それを耳にした奏龍は俺に向かって「夢でも見てたんじやないの？」と言ってから自分の席に戻っていった。

俺もその言葉に一言返そうとしたが、それと同時に担任である水上先生が教室に入ってきたために中断せざる終えなくなる。

そもそもこのところ夢だったら俺の財布から金が減ってるはずが無いだろう……奏龍の馬鹿野郎が

「おい、朝から何をぶつぶつと呟いてるんだ、ささみやあー。まあ大方、今神に対する暴言だろうから別に構わないんだがなー」

そう言つて水上先生は華麗にクラスの空気を暖めてくれる。おかげで、クラスの大半の人物が苦笑いしているか失笑している

もつとも、そんなことを言われている奏龍は堪ったものではないだろうがね。

「先生ッ！！ さらつと酷い事を言わないでくださいよ！？」

「それじゃ、HRを始めるぞー」

「スルーですかっ!？」

「ああ、いちいち煩いな今神は……それじゃ質問だ。良いニュースと良いニュース、どっちから先に聞きたい？」

「あの、水上先生？ 選択肢が一つしかないんですけど……」

奏龍が申し訳なさそうにそう言つと、水上先生は何事もなかったかのように話を続ける。そもそも、今の質問に意味は在ったのだろうか？

「それじゃ……喜べ野郎ども、今日から新しい女性徒がこのクラスに編入する事になった。私から見ても結構可愛い顔してるから彼女居ない男子は頑張れよ!!」

そういつと、水上先生は右手で廊下に居るであろう編入生を手招きする。

それに気が付いたであろう編入生は閉じられたドアを丁寧に開けて、この教室にゆつくりと入ってきた。

「自己紹介頼めるか？ 私はそういったことをするのがめんどづい…

…いや、苦手だね」

「別に大丈夫ですよ」

「そうか、それは助かる」

流れるように教室に入ってきた編入生の姿に俺は目を疑う。

「初めまして、今日からこのクラスでお世話になります」

何故ならそこには、昨日ファミレスで無理矢理俺に支払いを押し付けて帰ってしまった人物が立っているのだから

「はねもり ゆい羽森結衣と言います。好きなものはファミレスのオレンジジュースで、嫌いなものはご都合主義者です」

しかも前の席に座っている奏龍は、俺のほうを再び忌々しそうなモノを見る視線で見ている。

それ以前に今の自己紹介はなんだ？ 好きなものはいいとして嫌いなものがご都合主義者って自分の事じゃないのか？

「おう、自己紹介ありがとう。それじゃ、席は……………その一つだけ空いてる席に座ってくれ」

「わかりました」

そんなことを考えている俺なんかいざ知らずといった表情で、羽森結衣はこちらに向かって歩いてくる。

それはきつと俺に用事があるではなく、俺の隣の席が空いているからだと用意に想像がつく。

「ね、また会ったでしょ？」

「まさか転校生だったとはな……………はあ、どんな神様の嫌がらせなんだか」

「まあ、これからよろしくね。さ・さ・み・や君」

ああ……………これはきつと、この世界の物語を書いている神様と言っやつがデタラメに書き殴った、暇潰しの為だけに用意された喜劇なんだろうな　　そう思っていた。

けど、そうじゃないんだ。

” 此処から ” 俺の物語は始まったんだ。

第一章・幻想 その二（前書き）

第一章・幻想 その二

羽森結衣という編入生という名の転校生がこのクラスに来た事により、同学年の間では話題になっていないのではないだろうかと考えはしてみていたが、全くの杞憂に終わった。

一時限目から放課後になるまでの間、他のクラスの生徒は転校生について尋ねてきた様子もなく、同じクラスの連中に至っても羽森結衣を質問攻めにする事はなかった。

だが、そんな中でたった一人……今神奏龍は俺の机の上に堂々と座って羽森結衣との会話に花を咲かせていた。

「でさ、遼ったらなんて言ったと思う？」

「な、何を言ったんですか？」

「殴るのも殴られるのも痛いからゴメンだ」だって。明らかに相手の事見下しちゃうてるよねえ、あはははは

その会話の内容は若干だが脚色された『笹宮遼』と言う存在についての武勇伝だった。

正直に言おう。つまり、この俺について面白おかしく会話をしていると云う事だ。全くもって意味不明であり、俺にとっての黒歴史にプラス を加えて話しているのだから嫌がらせ以外の何者でもない

「でも、ささみや君は本当に喧嘩が強いようでしたよー!!」

しかも、羽森結衣は昨日のDQNに絡まれていた時の俺の動きを真似しているだろうと思われる動きをしながら、シャドーボクシングのような動きをしている。

確かに放課後と言う事もあり人も教室にあんまり居ないが……全く居ないと言うわけではないので俺に関しての噂話を広げるような真似はよして欲しいところだ。

「そつだよー、遠はデタラメって言うてもいいほどに喧嘩慣れしてるんだよ」

「あれー？ どうして”強い”じゃなくて”慣れ”なんですか？」

奏龍の言葉に疑問を持ったのか先ほどまで動いていた羽森結衣の動きが止まる。

……と言うより、せえせえと息を切らしているところを見ると本気で疲れているようだ。それほどまで本気で動いていたと言う事だろうか？

「だって、今でこそ『コレだからDQNは……』とか言ってるけど、遠も中学時代は自他共に認めるほどのDQNだったからね。自分から進んで喧嘩売ってたんだよ」

なんて思っていたら、奏龍が俺の黒歴史を少しずつ暴露していく。

だから俺はそれをやめさせるべく奏龍の肩に手をのせて、奏龍に聞こえるように耳元で呟く

「おい、奏龍……その話は忘れろって言うていたと思ったんだが」「えー、別にいいじゃんかよ。別に中学生特有の病気を患っていただけじゃん？」

「そういう問題じゃねーだろう。そもそも、中学生特有の病気っていうけどよ、未だに患ってる残念な奴も居るんだぞ」

「だから、遼は自分で『あの時の自分はイタイことしてたなあ』って自覚してるから別にいいじゃんかよー」

と言った具合に、奏龍は俺が言いたい事の意味を理解してくれずに黒歴史を話す事をやめてくれる素振りを見せない

「どうしたんですかー、いまがみさん？」

「ゴメンねー、結衣ちゃん。遼が恥ずかしいからやめてくれってさ」

しかし、奏龍も根はいい奴だから他人が嫌がる事は止めてくれる。

「恥ずかしいも何も自分の忘れたいと思ってる事は話されたくないだろ！？」

「はいはい、もう話さないから耳元で怒鳴らないでよー」

もつとも、毎回その”嫌がる”ような原因を作るのはその奏龍本人なのが困りどころなのだが……………

「折角面白いお話だったのに……………仕方が無いですねー、ささみやくんは〜」

それ以上に困りモノなのは羽森結衣だ。奏龍とは違って明らかに狙ってない……………要するに天然要素が強いのだ。

しかも見た目は中学生と間違えそうになる外見と来た。案外、見た目通りに中身も成長していないのだろうかと思うのも仕方ないのではないか。

それと、もう一つ言う事があれば人の名前を呼ぶ際にどうも舌つ足らずな感じがする。おそらくそう言ったことも合わさって見た目以上に幼稚に見えるのだろう。

言うなれば漢字とひらがなの差程度だが……………

「どうしたの遠、そんなに面白い顔してさ……………はっはーん、さては何かの解決策でもみつかったのかい？」

「あ、本当です。ささみやくんの顔が面白いですねー」

ようやく分かった。今まで感じていた羽森結衣に対するあの”異様なウザさ”は、コイツが中学生になりかけの小学生と同じ雰囲気を出しているからだと言う事に。

「いや、面白い顔とか言うなよ……本当に失礼なやつ等だな。それと奏龍、どうしてそう思った？」

気がついてしまえば対応は簡単だ。時折見せる異様な雰囲気を除けばコイツの扱いは小学生と同じものでいいのだから。

「だってさ、遼がそんな顔をするときって大抵は何かの解決策を見つけたときだよな？」

「いや、聞かれても分からん。自分が話しているときの顔なんて見る奴なんてそもそも居ないだろ？」

「いやあ、確かにそうだけどさ……もしかして自覚なかったの？」
「自覚するも何もそんなこと知らないし、今初めて聞いたんだけど……」

そもそも、今の今までそんな話をされた事もなかったし聞いた事も無い。むしろ今知った。

そんなことを思っていたら、今度は羽森結衣がむくれ顔で文句を言ってくる。

「楽しそうに二人だけで会話を進めて……私が全然入っていけないじゃないですかっ!!」

勿論、その文句も到底理解できないものであったが。そもそも、今の会話をどう聞いたら『楽しそう』にという単語が付くのか説明してくれ

「なんですかその顔は？　まるで『今の会話に楽しそうだって言う単語が付く意味を俺に説明してくれ』って言うような顔してます

「よ

「……………」

「どうして無言なんですかつ！？」

どうしても何も、人の心をまるで読んでいるかのような事を言われれば無言にもなるのではないだろうか？

「それに心なんて読めるはず無いじゃないですか！！」

「あー、結衣ちゃん？　ちょ、ちよつと遼……結衣ちゃんが反応しなくなっちゃったんだけど！？」

そんな状況を”初めて”みる奏龍は流石に動揺している。それもそうだろう、次から次へとマシンガンのように羽森結衣という少女から言葉が撃ち出されて居るのだから。

正直なところを言うと、俺としてもあの妄想と現実を一緒にして繰り出される言葉の雨は二度と味わいたくないところなんだが……

「ま、まあ、奏龍も早いうちに知っておいたほうが良いだろうし……

……」
「な、何の事だよっ？」

そもそも、普通の人間というものは奏龍のような反応を示すのが正しい。

いくら二度目とはいえ、アレに慣れてしまっただけは人間失格な気がする。

「何がって……羽森結衣の妄想が現実に駄々漏れになるところだよ。しかも本人は無意識らしい」

「なんだよそれはっ!？」

「見てれば分かるさ……」

さて……前回は悲劇のヒロインがどうとか言っていたが、今回はどんな事を言っているのだろうか？

俺は奏龍にそこまで言ってから口を閉ざし、こんな会話の間にも止まらず他人に聞こえるような声で独り言のように呟いている羽森結衣を見る。

「そもそも私にそんなエスパーじみた能力があれば……うふふ……じゃなくって、そりゃあ私だって他の人の心を読めればいいなあなんて思ったりしますよ!？」でも、やっぱりそれってプライバシーの侵害になると思うんですよ。でもでも、やっぱり……うふふ」

そこには前回同様に初めこそ正論を言っていたかと思えば、突然あらぬ方向に迷走し始めた拳句、座った状態のままくねくねと身悶えしている羽森結衣の姿があった。

「あの一、遼くん？ 結衣ちゃんは一体何処に向かっているのかな……？」

奏龍はそんな状況である羽森結衣の姿を直視せずに俺に尋ねてくる。優しいやつだなお前は……俺なら誰かのこんな姿を間違っ て見たとしたら、絶対に距離を置く。

何の躊躇いもなく俺は断言できる。

「……………妄想タイム？」

「あー、うん。質問した僕が悪かったよ……………ゴメン、遼……………」
「を街中でやられたら嫌だね」

俺の質問に対する答えを聞いた奏龍は理解したというように謝罪しながらそういっ たのだった。

「うふふふ…考えてるだけでも涎ヨダレが……………」

もつとも、話の話題の中心とされている本人は未だに妄想の世界に入り浸ったままなのだがね。

「ねえ、結衣ちゃんはどうかやってたら戻ってきてくれるんだい？」

「取り合えず手を握って呼びかければ良いんじゃないか？」

「最後が疑問系なのが若干気になるけど……これ以上は僕としても見てて痛々しいからやってみるよ」

「そか、頑張れよ」

口調こそいつも通りを装って言うては見たが、内心では羽森結衣が誰に対してでも同じような反応をするのが気になっているのも事実だ。

俺のときは変態呼ばわりされてムカツと来たけど、奏龍はどんな扱いをされるのだろうか？

「おい、結衣ちゃん。戻っておいでー」

「でもでも、相手の心が分かるって事は絶対にフラれ無いつてことだから　　って、あれ？　ど、どどど」

「どっ」

「ど、どどどしていまがみさんが私の手を握っているんですかあー

！！　ま、まさかいまがみさんも変態なんですかっ!？」

やはり……というべきだろうか。奏龍も俺同様に派手に驚かれた挙句に変態呼ばわりされている。

だが『いまがみさんも』と言っている辺りで俺が羽森結衣の中で変態として位置づけられているのは確定していると考えるべきだろうか考え物である。

しかし、手を触っただけで変態呼ばわりをされるのならば”もしも”間違っただけで胸に触ったりしたらどうなるのかも気になる。

「あー、結衣ちゃん」

「私、シヨックです。超シヨックです！？ あれ、どうして私は今疑問系になっただけでしようか」

「話に脈絡がなさ過ぎるんですけどっ！？」

ああ、やっぱり羽森結衣の素はこっちだったのか。むしろ見た目通りで安心したって言うかなんていうか……

まあ、これで奏龍にも俺の言いたかった事は理解してもらえていれば良いんだけどな

「そっいえば、どうしていまがみさんは私の手を握っていたんですか？」

「僕の発言はなかった事にっ！？」

「……？」

そして、羽森結衣はというと奏龍の発言と行動をみて状況がいまいち理解できていないのか首を傾げている。

「可愛く首を傾げても

ああ、もう意味がわかんねー!!」

奏龍も途中までは何かを言おうとしていたようだが、完全に羽森結衣のペースに乗せられてしまい、訳が分からなくなり挫折したようだ。

「ひえっ!? いまがみさんどうしたんですかっ!?!」

「アಂತのせいだよっ!?!」

「私のせいですかっ!?!」

しかし、未だに一つだけわからないことがある。今の羽森結衣の喋り方に特に違和感を覚える事はないが、ファミレスでの話の時に一度だけ雰囲気が変わった喋り方をしていたと言う事だ。あの時だけ羽森結衣を『羽森結衣』として認識できなかった自分が居たような気がする。

こんな事を考えるのも俺の頭が「黒歴史を築き上げた時の自分の頭に戻っているのではないのか? はあ、やっぱり俺もDQNか……」と多少不安にもなるが、おそらくそうではないだろうと確信している自分も居る。

「そうだよ、結衣ちゃんのせいだよ!?!」

「私の”性”ってどういうことですか!?!」

「なんかイントネーションが違ってるんですけど!?!」

そう、アレはきつと人ならざるモノ

「　　って、遼？　　おい、そんなにぼんやりとしてどうしたんだい」

「およ、本当ですね。ささみやくんがぼんやりとしていますね」

ならばコノセカイはゲンジツではナイノダロウカ

「うーん、このまま放っておくのも良いんだけどね……前にこの状態のまま放置したらね、遼って一日中学校にいたことあるんだよ」

「それは………大変ですねえ。どうすれば戻ってくるんですか？」

「ちよつとコツを掴まないと難しいけど、物理的に遼を殴ればいいんだよ」

「殴る………ですか？」

「そう、殴るんだよ」

ユメをユメだと認識してはイケナイ……

「こんな感じにねっ！！」

戻る事ができなくな

！？

「ブッ!？」

「おーっ、見事な右ストレートですっ!!」

突如、頬を駆け抜ける衝撃。

痛い。結構痛いどころかかなり痛いです

「痛い……なんで殴られてんだ？」

「いやあ、前みたいに夢想の世界に入っちゃってましたからついついね」

奏龍の言葉から現状の確認を急げ。つまり、要するに俺は羽森結衣みたいに黒歴史時代の自分に戻っていたって事か？

もしそうだったら激しく鬱だ。陰鬱だ……

「あの、ささみやくん？ 今、何故か分かりませんが激しく馬鹿にされた気がするんですけどー」

「H A H A H A、そんなはず無いだろう？」

「どうして疑問系なんですか？ 絶対に馬鹿にしていますっ!!」

「さあ奏龍。明日の日曜日に向けて帰ろうか」

取り合えず、日曜日ともなれば羽森結衣なんかと顔を合わせる必要も無い。

「あ、別にいいんだけどさ……無視してもいいの?」

だが、奏龍は先ほどから俺に向かって文句を言っている羽森結衣のほうを見ながらそういうのだ

「そうです!!　いまがみさんの言うとおりです。こんな超美少女・羽森結衣ちゃんを無視してもいいんですか!？」

「ぷっ、超美少女?　お前は精々、超微少女だろ」

「激しく遺憾です!!　まあ、それは良いですけど明日はお二人でお出かけですか?」

「遺憾って言うてるのに気にしないのかよ……そうさな、明日は二人で駅周辺でもぶらつく予定だな。それがどうしたんだ?」

「いえ、なんでもないですー」

羽森結衣は俺にそう言って、奏龍のほうに近づき携帯を出しておそらくだがアドレスの交換をしているようだ。

それが済んだのか、おとなしく羽森結衣は大きく手をぶんぶんとこちらに振ってから帰っていった。

「なんだっただよ……」

「で、明日は本当に駅周辺でもぶらつくの?」

「ん、お前もそれで良いならそうするけど」

「了解、それじゃ明日は駅前の……そうだね、喫茶・こきりに何時もの時間でいいかな?」

「こつちも了解つと。そんじゃ、また明日な」
「じゃあまた明日」

そうして、俺たちはそれぞれ自宅に帰る事となった。

明日は日曜日だ。俺も今日は寄り道せずに帰るかな………

第一章・幻想 その三（前書き）

「ただいまー……………つて、またかよ」

白目を剥いて暗黒物質ダークマターを片手に持ちながらテーブルの前で倒れる姉の姿。そして、テーブルを挟んで向かい合わせに座っていたと思われる妹があわあわとしている姿。

ぶっちゃけると、コレが笹宮家の日常である。

「あ、お兄ちゃん！！ 涼香お姉ちゃんが私の造った料理を食べたら うふう……………」

「なに…少し衝撃的な味がして驚いたただけ……………」

「お姉ちゃん！！」

俺が帰ってきたことで意識を回復した涼香姉さんはよろよろと立ち上がると、妹である由岐は涼香姉さんに抱きついていた。

そして俺はと言うと、いつものように何事もなかったかのようにリビングにあるソファの上に鞆を置き、ブレザーを脱ぎ捨てる

そもそも、どうして毎度の事を繰り返しているのか全く持つて理解ができません。

「む、弟よ。姉たるもの兄妹の世話を焼くのも勤めと言つものだろ
うさ。遼くんも由岐ちゃんもお姉さんにとっては大切な家族だから
な」

「ッー！ 面と向かってよくそんなに恥ずかしい事が言えるな」

「お姉さんは嬉しいんだよ。遼くんもあの頃に比べたら普通に会話を
してくれるし、由岐ちゃんには自主性というものが現れてきた。

それとも、遼くんはお姉さんが邪魔だからこの家から居なくなって
欲しいと言つのかい？」

その言葉を聞いた俺は一瞬だが固まってしまふ。現在、笹宮家の生
活費を稼いでいるのは隠す必要もなく涼香姉さんだ。

感謝する事はあれど姉に居なくなって欲しいと思つのは筋違いと言
うものだ。

「む……すまなかつたな遼くん。今の発言は忘れておくれ」

涼香姉さんも俺の気まずそうな雰囲気気が付いたのか、しまった
と言つ表情をしながらそう言つたのだった。

「あ、うん。俺も悪かつたよ、涼香姉さん」

「さて、それでは遼くん。帰ってきたところですまないんだが夕飯
を作つてはくれないか？ 今日昼を抜いてしまつてお腹がペコペ
コなんだ」

俺が同じく謝ったところで、先ほどとは打って変わって涼香姉さんは、お腹を押さえながら空腹ゲージがMAXだという事を俺に示すかのような仕草をする。

俺はそれに微笑しながらもこくりと首を縦に振ると、先ほどから涼香姉さんに抱きついていていた由岐に一声かける

「りょーかい。由岐、料理作るの手伝ってくれるか？」

「うん……私もお料理上手になりたいから頑張る」

由岐はそう答えると、涼香姉さんから離れてテーブルの上に置いてある暗黒物質を回収して台所に走って向かった

「さてと、なんか料理のリクエストはある？」

「何でも良いさ、遼くんが作ってくれるんだからな」

そして俺もその場から逃げるように台所に向かった。

自前のエプロンを台所にある棚から取り出し身に付ける。そして、台所の流し場の前に立つ。由岐も先ほどの料理に使っていたであろうエプロンを付け直し、台所の流し場の前に立っている。

そして、先ほど涼香姉さんにした質問を由岐にすると……

「由岐は何か食べたいものはあるか？」

「お兄ちゃんの作る料理って美味しいから何でもいいよ」

即答された。

よくよく考えれば姉妹であるのだから二人の答えは聞くまでもなく同じになる確率が高い。

「そんじゃま、作りますか」

冷蔵庫に入っている食材を適当に取り出し、俺は作業に入るのだった。

第一章・幻想 その三

テーブルの上に並ぶ数品の料理。エビチリに麻婆豆腐、野菜サラダと……中華料理が多いのは俺が和食を作るのが苦手であるからで、俺が作る時のご飯のおかずは大体が洋食か中華になる。

妹の由岐は調理こそ壊滅的に下手だが、下準備に関しては一般女性よりはできるほうだと俺は思っている。もう少し練習を重ねればきっと俺よりも料理が上手になってくれるだろう……俺はそう願っているよ由岐

「それじゃ、頂きます」

「いただきます」

涼香姉さんの声を合図に俺たちは食事を始めた。

涼香姉さんはどうやら本当にお腹が空いていたようで無言でパクパクと料理を口に放り込んでいる。由岐は涼香姉さんの食べっぷりを見て多少驚きながらも自分のペースでご飯を咀嚼している。

俺はというと自分の作った料理を食べながら、次回に料理をする時のために改善する点はないかと一応確認しながら食べている。

無言の食卓。別に姉妹、兄妹の仲が悪いという事ではない。この家では食事の時に極端に会話が少ないというだけの事だ。

そう、ただそれだけの事。

三十分が過ぎた頃には全員が食事を終え、各自で台所に立って食器を洗っていた。

「なあ、どうして二人は台所に居るんだ？」

「なに、料理を作って貰っているんだ。自分で使ったものくらい自分で洗うのが筋というものだろう」

「私も涼香お姉ちゃんと一緒の理由だよー」

そういわれてみれば俺も涼香姉さんが料理を作ってくれるときは自分で食器を洗っている気がする。

やはり、家族という事だ。根本的な部分では似てしまう、それが例え無意識の行動であったとしても。

「まあ、それは別にかまわないんだがね……遼くんはお姉さんが見るに疲れているようだがなにかあったのかい？」

「そういえばお兄ちゃん、心なしが表情が疲れてるねー」

姉妹そろって俺に言うという事は、俺はきつと疲れているのだろう。今日一日を思い返せば疲れる要素しかなかった気がする。

主に羽森結衣のせいだが……

「ああ、きつと今までに無いくらい俺は疲れているんだと思うよ…

…現実的に」

溜息混じりに俺がそう呟くように答えると涼香姉さんは考え深そうに、由岐は珍しそうにと言った表情で俺を見ていた。

「遼くんが現実に疲れるのか……ふむ、大方変な女の子に絡まれたと考えるのが妥当かな」

「涼香姉さん……どうしてそこで変な女の子って言う単語が出てくるのか説明してくれないか？ 理由しだいでは怒るよ」

そもそも奏龍といい涼香姉さんといい、どうして俺が疲れる原因やその他出来事に”変な女の子”という単語を入れるのか納得できない

45

「なに、別に大した理由じゃないよ。遼くんは昔からそうだった女の子から好意を向けられていたからね。今回もそうじゃないかって思っただけだよ」

「好意……ねえ。アレが俺に対する好意の行動なら俺は疲れる運命なんだろうさ……ははは」

無理矢理に俺をDQNとのいざこざに巻き込み、街中で不穏な言葉を公衆の面前で騒ぐように言いふらし、ファミレスで奢らせる。

コレを本当に好意として受け取っていいのだろうか？

もっとも、羽森結衣自身からは悪意すら感じ取れないのを考えれば

嫌がらせではないのだろうか……

「言葉から察するにどうやら予想通りのようだ……由岐ちゃん、
遼くんはおそらくしばらく戻ってこないだろうからお姉さんと一緒
にお風呂に入ろう」

「大変なんだね、お兄ちゃんって……」

そもそも、俺が知る女性には一人しか一般的に見ても普通といえる
女性はいない気がする。

今日は学校を欠席しているようだったから会話こそできなかったが、
よくよく考えてみれば彼女は今まで俺を支えていてくれた気がする。

それも俺が気付かない程度に……

明日…は、予定が入ってるから無理だから月曜日に学校で感謝の言
葉を伝えよう。きっと彼女からしてみれば突然すぎる良くわからない
ことになるだろうけど。

「そつえば涼香姉さん　　つて、あれ？」

さっき話していた事の続きなんだけど……そう続けようとして、
隣にいたはずの涼香姉さんに声をかけようとしたが、隣を見ると涼
香姉さんどころか由岐すらいない。

時計を見ると一時間ばかり時計の針が進んでいた……おう、また

無意識に考え込んでしまったのか

「むう、この考え込む癖はどうかしないとな……………」

本気でそう思う。それに、この癖は就職をしたときに限って絶対に不利になる。

作業中に突然考え込んで一日が終わっていたら間違いなくクビにされるだろうし。

「取り合えず風呂に入ろうかな……………」

疲れている脳を休めるには風呂で湯船に使ってゆっくりするのが一番である。尤も、コレに関しては人それぞれであるだろうけど俺にとっては風呂に入ることが一番効果があるのだ。

廊下をのそのそと歩き風呂場に向かう。その途中に風呂場から女性の話し声が聞こえてきたため、間違いなく涼香姉さんと由岐が入浴中だと分かった。

だから俺はその場で一旦停止し、リビングに戻るか多少待つても廊下で待っているかを考える。

でも、どうせ待つ事になるのならリビングのソファで寝転がっている方が楽だろうし……………

「仕方ないしリビングのソファで寝転がってるかな……………」

「遼くん、大丈夫だ。私達なら今ちようど出たところだ」

「へっ？」

戻ろうとしたところで後ろから声を掛けられたために多少声が裏返ってしまった。

「というか、俺は一体何分考えていたのだろうか？」

「それともお姉さんと一緒にお風呂に入るかな？」

「なっ、なな、いらんわっ！！」

「今なら由岐ちゃんも一緒だぞ」

「どうしてそこで由岐を出した!？」

俺が涼香姉さんに半ば叫ぶように尋ねると涼香姉さんは笑いながら答えた。

「なに、お姉さんの豊満ボディと由岐ちゃんの未発達なロリボディに挟まれたら君はどんな反応をしてくれるのか気になってね」

「お、お姉ちゃん!!」

そこで先ほどまで後ろで黙って話を聞いていた由岐が涼香姉さんに怒った風に声を上げる。

だがな…由岐。いくら家族といえどもタオルを体に巻いただけの状態でお兄ちゃんの前に立たないでくれ…流石に目のやり場に困るから

「どうやら由岐ちゃんは不満らしい、残念だったな遼くん。それと由岐ちゃん、先ほどから遼くんが私より後ろに視線を向けないようにしているのは君のせいかな。いくら家族といえどもキチンと服を着てから廊下に出ような」

「「なっ！！」」

俺と由岐は同時に声を出していた。主に由岐は俺が男であると思いついたように。そして俺は何故、たったそれだけで俺の考えを見抜けたのかという驚きの意味で。

というよりも、涼香姉さんって鋭すぎるような気がする。

「まあ、驚いているのは良いんだが由岐ちゃんは服を着てきなさいな」

「あ、うん。ゴメンねお兄ちゃん」

だが、涼香姉さんはそんなことは知らんと言ったふうに笑いながら由岐に指摘している。

由岐もその指摘に従い脱衣所に戻っていった。

「さて、遼くん」

「ん、なんだ涼香姉さん？」

「いま脱衣所に入るときつと素っ裸の由岐ちゃんが見れるぞ」

そして、この場に残った涼香姉さんは少しニヤケながら俺にそう言う。

そもそも涼香姉さんはどうしても姉妹のどちらかの裸を見せたいのだろうか？

「……そんなことしねーから」

「そうか、お姉さん少し残念だよ」

そう言って頭に巻いたタオルを外し、首に掛けなおすと涼香姉さんはリビングに戻っていった。

「つか、どうして涼香姉さんはそんなに残念そうなんだよ……」

「あれ、お兄ちゃんだけだ……お姉ちゃんは？」

「由岐はどうか素直に成長してくれよ……」

「お兄ちゃん……？」

俺は由岐の両肩に手をのせてそう呟いてから、由岐の不思議そうな声を聞かずに脱衣所に入った。

しばしの間、俺は湯船に浸かってから何事も無かったかのようになり
ビングに戻った。

「さて、遼くんが戻ってきたところでお姉さんが作っておいたデザートを食べるとしましょう」

「やったー！！ お姉ちゃんの作ったデザート」

そこで待っていたのはフォークを片手にテーブルの前に座っている由岐と、台所からリビングに向けて何かを持ちながら歩いてくる涼香姉さんだった。

「涼香姉さんのデザートって……忙しくてお昼抜いたんじゃないかなのか？」

「なに、忙しかった理由はどうでも良いだろう？ 結果的には忙しくて昼食を抜いたのだからな」

涼香姉さんはそういいながら台所から持ってきたショートケーキをテーブルに並べる。その姿は本職のウェイトレス顔負けなくらいに美しいものだった。

そして、由岐は珍しく髪をカチューシャで止めた状態にいる。まさ

に、たい焼きを持たせたくなるようなパジャマ姿だ。

「遠くん……その、そんなにまじまじと眺められると恥ずかしいの
だが……」

そんな俺の二人を眺める視線に涼香姉さんが気付いたのか、ニヤケ
顔のまま俺にそう言った。

「……誰も涼香姉さんを直視して無いからな。それは勘違いだか
らな」

それにさ、涼香姉さん……そういうことを言うならせめてもう少し
だけ頬を赤らめてくれた方が俺を騙せると思うんだ。

そんなニヤケ面だったら誰も騙されないと思う。

「もー！！ そんなこと良いから早く席に座ってよお兄ちゃん！！」

俺がそんなことを考えながら涼香姉さんを見ていたら、由岐に怒ら
れてしまった。

「あー、悪い。今座るよ」

「はーやーくー！……」

「はいはい」

それにしても、由岐は本当に涼香姉さんの作るデザートが好きなんだな。

「ふふっ、由岐ちゃんがそんなに嬉しそうでお姉さんは満足だよ…
…ああ、遼くん。鼻から血が出そうだよ」

「分かった分かった、どうでも良いから早く涼香姉さんも座ってくれ。由岐が我慢できなさそうだからさ」

「よしよし、了解したぞ」

俺が席に座り、涼香姉さんが席に座る。

そして、涼香姉さんは短く言う

「それじゃあ食べてくれ」

俺と由岐は一緒にではないが「いただきます」と言う。

「いただきますーすっつと…」

だが、由岐は「いただきます」ではなく、言うなれば「いただきましたふっ」と言う感じに、言うと同時にショートケーキを頬張っていた。

俺もフォークで一口サイズに切り取り口に運ぶ。味は言うまでもなく美味しかったといえる。由岐に至っては珍しく俺の残っているシヨートケーキを狙ってこちらを見ていた。

普段がとて面白い子であるためにこういった行動をする事自体、由岐には珍しい事だ。だから俺はもう一口だけ口に運び、残った分を由岐にあげるのだった。

涼香姉さんはそれを見ながら微笑をしていた。その笑い顔がどうしようにもなく嬉しそうに見えて、俺は何も言えなかった。

「ごちそーさまー、美味しかったよお姉ちゃん!!」

「そうかそうか、それは良かったよ。遼くんも大人になったものだな……………もう、お姉さん嬉しすぎて泣いてしまいそうだ」

「いつまでも子供扱いをしないでくれよ!!」

「はっはっは、お姉さんからしてみれば遼くんはいつまでも子供さ」

そんなことを今日の最後に言い合いながら、長いようで短い一日は終わった。

明日は奏龍と一緒に駅周辺をぶらつく予定もあるし、今日は早めに寝ておこうかな……………

俺は自室のベットに身体を投げ、そのまま眠りに付くのだった。

第一章・幻想 その四（前書き）

第一章・幻想 その四

日曜日の午前9時30分に俺は目を覚ました。昨日は涼香姉さんや由岐と話をしたりしたが、それなりに早く寝ていたために二度寝をしようとも思わないくらいに寝覚めが良かった。

奏龍との約束の時間までは約1時間ほどの余裕がある。しかし、外出用の服を選び、着替えてから身だしなみを整える時間に、移動の時間を考えると全然時間に余裕などありやしない。

クローゼットから適当に上下の服を選びそれに着替える。そして、自室を飛び出し洗面所に向かう。その途中に由岐とすれ違ったが「おはよう」とだけ言ってやり過ごそうとした。

だが、由岐は俺に何かを尋ねたかったのか俺の手をいつの間にか掴んでいる。この状況では話を聞いたほうが早いと俺は考え、おとなしく由岐に尋ねる

「どうしたんだ？」

すると、由岐は掴んでいた手を放して言葉を放つ。

「お兄ちゃん。今日の朝ごはんは食べていくの？」

現在は朝といえる時間だが、今食べると昼食を満足に食べられない

事を考慮し、由岐に食べないという事を手短かに伝える。

由岐はその答えを聞くと少し不満そうではあったが、俺の手を離してくれた。

俺はそのまま洗面所に入り、寝癖の付いた髪を整える。前髪は水だけで何とか直す事ができたが、横髪がどうしても跳ねてしまったために仕方なくスプレーをかけて落ち着かせる。

そのほかにある程度の部分をチェックし、俺は家を後にした。

駅までは歩いて十五分。残りの時間は約20分あるが何故か早歩きになってしまふのは分かって貰えないだろうか？遅れるくらいなら多少疲れてでも早くつきたいと思うはずだ。

その途中で見覚えのある格好をした誰かに良く似た姿をした誰かが声を出して歩いているのを偶然見かけてしまったが、俺は気付かないようにその場をそうそうに歩き去る。

残り10分。喫茶・こきりまではあと約3分、時間的には約五分前に到着できるはずなのでどうやら遅刻せずに済んだようだ。

そこから歩くスピードを少し落とし、いつもの自分のペースで歩く。少しだけだが息が荒くなっていたのでその合間に呼吸を整える。

そんなことをしているうちに、無事に喫茶・こきりの前に俺は到着していた。

「ふう、予定外の時間ジャストだな……………奏龍は　　と。なん

だ、先に中に入ってるのか」

店の入り口に当たる扉を開くと入店者が来たと言う事を伝えるベルがなる。俺はテーブル席に座っている奏龍のところにゆっくりと歩いて向かう。

すると、店に入ってきた俺に気が付いたのか奏龍はにっこりと笑いながらテーブル席の前まで来た俺に言う。

「うん、時間通りだね遠」

「なんだよ、そのいつも俺が遅れてくるような言い方はさ？」

「実際に三回に一回くらいは遅れてくるでしょ」

悪気は無いと言ったふうに奏龍は何故か三つあったコーヒーのうちの一つを俺に差し出す。

俺はコーヒーを受け取りそのまま口に運ぶ。まだ熱いくらいなのでおそらく、たった今出されたコーヒーなのだろう。

下手をしたら冷めたコーヒーを飲む事になっていただろう。コレは奏龍からの「遅刻をしてもいいことはないよ」と言う無言の忠告なのだろう。

「……悪かったな。でも、今日は遅刻して無いだろ？」

「そうだねー。確かに今日は遅刻して無いけどねー。それと実はね、今日はもう一人この時間に此処で待ち合わせをしている娘がいるん

だ」

「……それがどうかしたのか？」

俺は再びコーヒーを口に運びながら奏龍の言葉に疑問系で返す。奏龍が俺以外の誰かをこの場に誘う事はあまり珍しい事ではないし、むしろいつもの事である。

それだけに俺としては疑問しか出ないわけだ。

「いや、どうかしたのかってね……普通は嫌なものじゃない？ 誘った相手以外に誰かが居るのってさ」

「いや、そもそも結構な頻度でそういうことがあるからそれが普通だと思っていたよ」

だったら初めから呼ぶなよ……と、素直に言えるはずもなく、俺は別段気にすることも無いだろうといった風に返すと奏龍はつまらなそうな顔になった。

「まあ、でもいいかなあ。今回は僕が誘ったんじゃないから頼んできたんだし」

と、ついさつきつまらなそうな顔に変わった奏龍の顔がニヤケ面に化する。奏龍がこういった顔をする時には大まかに分けて二つの理由がある。

一つ、それは俺が驚くであろうこと。二つ、間違いなく俺が何らかのリアクションを取るであろう事だ。

選択肢に俺の行動しかないのは考え物だが、長年の友人であるためにその所は寛容にもなってしまう。

その時、再び入店者を伝えるためのベルが鳴った。

「お、きたきたっ。こっちだよ」

奏龍はその音を心待ちにしていたといった風に喜んでいるかのよう
に、新たなる入店者に手を振って此処にいると言つ事を教えた。

俺は奏龍の姿を見ながら、今回は誰を誘ったのかと言つことを推測
する。今までの大半はクラスメイトの誰かであったため、今回もお
そらくクラスメイトの誰かであろう。

そこで、嫌な予感を覚えたために俺はついつい奏龍に尋ねてしまっ

「ま、まさかだとは思つが羽森結衣じゃないだろうな……？」

「まさかー、流石に結衣ちゃんは誘つてないよ。あ、でもその反
応的には今度誘つてみるのも面白いかもねー」

「全力でやめてくれ……」

嫌な予感が外れたために、体から力がぬけてテーブルに突つ伏す形
で前のめりに倒れこむ。例えるなら”ぐでーん”と言つた言葉が最

適だろう

「あ、おはようございます今神くん。それと遼くん、おはよう」

その時、先ほど店内に入ってきた人物が俺達の座るテーブルの前にきて挨拶をしてきた。その声は昨日、学校を休んでいたために聞く事のできなかつた彼女の声であった

「あ、あれー？　なんで僕は名前じゃないのかな」

「おはようございます、今神くん」

「まあ、別に呼びたくないならそれで良いんだけどね……トホホ」

そういえば、どうして彼女は昨日学校を休んでいたのだろうか？　もし、風邪を引いて休んでいたのならは無理をしてここに来ているのではないだろうか。

「あの、遼くん？」

「あ、ゴメンね。ほら遼、ちゃんと挨拶は返さないとダメだろ？」

だが、今の彼女の表情などを見る限りは調子は悪いようには見えな
い。だったら、いつも通りに接するのが一番だろう。

「あ、悪い。ちょっと考えちゃってさ……おはよう、希実香」

「あつ、別に遠くんが謝る事はないよ。だって、今神くんが遠くんに教えていなかったのが悪いんだもん」

そう言つて、希実香は奏龍を指差してにっこりと微笑んでいる。

今思えば、今までも希実香は一度も俺の事を責める事はなかった気がする。やっぱり、希実香には昔からずっと苦労をかけているんだな。

「えっ、僕のせいですか!? りょく、希実香ちゃんに説明してよ……このままだと一方的に僕が悪いみたいじゃないか」

まあ、苦労の原因を作っているのは紛れもなく奏龍なんだろうけどさ。でも、俺と奏龍と希実香の三人が揃つてやっとあの頃の話ができる。

紛れも無い、幼少の頃から俺を支えてきてくれたこの二人となら。

「けどな、奏龍。サプライズって言う点では楽しみを覚えているのは確かだけだよ……希実香が来るって時くらいは教えて欲しいって結構頼んでると思うんだが？」

「うっ……で、でもさ、希実香ちゃんだからこそサプライズとしては最高だと思うんだよ」

先ほどまで俺の目を直視して頼んでいたはずの奏龍だが、現在は必

死に目を合わせないように目を泳がせている。

まあ、確かに奏龍が言うように、俺にとっては希実香が俺達と一緒にぶらつくというのは極上なサプライズに変わりは無いから然程気にはしていないのも事実なんだが……

「まあ、別に良いけどよ……希実香、こうして毎回予定を組んでくれるのは奏龍なんだ。だからこれくらいは大目に見てやらないか？」
「私は別に遼くんがそれでいいって言うならそれでいいんだ。よかつたね今神くん」

希実香はそう言うって俺の隣の席に座ると、奏龍から謝罪の代わりにように差し出されたコーヒーを受け取り、自然な動作で一口だけ口に含むとテーブルに置いた。

「それじゃあ、今日の計画なんだけど」

そこで、先ほどまで重い空気を作っていた張本人である奏龍がその空気を破壊して今日の計画について話し始めた。

「実はね、今日は遊園地に行こうかと思っています」

そう言って、長財布の中から四枚のチケット……おそらく遊園地のチケットを俺と希実香に一枚ずつ奏龍は配る。

「お、おい。流石に全額奢りなんてお前に悪いだろ……」

しかし、俺はそのチケットの裏に書いている金額（8600円）を見てチケットを奏龍に返そうとした。

だが、奏龍はそれを問題ないと言ったふうに俺に持たせなおすと言
うのだ。

「ん、それならご心配なく。コレは前から送っていた懸賞で当た
った、いわばタダで手に入ったものだからさ！」

「今神くんって昔からこういうのに良く当たるよねー。なにか秘訣
でもあるの？」

希実香は疑問に思ったのか、奏龍に期待を込めて質問をしている。
良ければ自分もやってみようかと言う表情をしながら。

「うーんとね、これと言った事はしてないよ。多分だけどさ、地道
に送り続ける事がいいんだろうね」

「地道……か。うん、参考にならなかったけどありがとうね。」

「希実香ちゃん……そこは嘘でもいいから参考になったって言って
欲しかったなー」

希実香の笑顔と奏龍の微妙な表情。だったら俺は今、どんな顔をし

ているんだろうか？

二人の表情を見て笑っているだろうか？ それとも、何かを考えている難しい表情をしているだろうか……まあ、別にそんなことはどうでもいいことだけだよ

「俺はお前の計画に賛成だけだよ、希実香はどうなんだ？」

俺は奏龍に向かってそう言った後、希実香にもどうだろうかと尋ねる。

「私も別に大丈夫だよ遼くん」

すると、やはりと言うべきか希実香はあっさりとOKを出した。

そこで俺は時間を確認する。時計を見ると既に12時を時計の針は示していた。然程長い間話していた気はしなかったのだが、どうやら結構時間が経っていたようだ。

「じゃあ、昼食は現地で取る？ それとも此処で食べていくかい？」

奏龍は俺と希実香を見ながらそう尋ねる。

俺としては朝を抜いているので此処で食べたいという気持ちはある

が、別に我慢できないほどでもない。だから希実香の答えを先に聞くために希実香を見る。

「じゃあ、時間もちようどお昼時だから混む前に此処で食べたいな」

希実香は奏龍にそういうと、奏龍は俺を見る。俺は別にそれがかまわないとアイコンタクトを送ると、奏龍は言う

「じゃあ、此処で食べて行くってことで決まりということに決まりました」。各自品物を決めたら僕に教えてねー」

そう言って、奏龍は三人で見れるようにお品書きを広げるのだった。

第一章・幻想 その五（前書き）

第一章・幻想 その五

喫茶・こきりで食事を終えた俺たちは、遊園地に直行する電車に三人で並んで座っていた。右から奏龍、俺、希実香の順だ。

昔は奏龍も希実香も互いに名前で呼び合っていたのに、今では何故か奏龍だけが希実香の名前を呼び、希実香は奏龍のことを苗字で呼んでいる。

俺にそれがいつから変わったのか分からない。おそらくだが中学時代に、あの二人と距離をとっていた時期に何かがあったのだろう。けど、本人達は何も言わないのできつと話すような事ではないのだろう。

あの頃の俺はそれどころではなかったから。

『次は〱遊園地前〱遊園地前でございます。次でお降りになるお方は右側のドアでお待ちください。なお、お荷物をお忘れの無いようお願いします』

そこで、俺の思考を中断させるように電車にアナウンスが流れる。

「遼くん。次で降りるよー」

俺がそのアナウンスに気がついていないと思ったのか、希実香が俺

の方を叩いている。

「あー、大丈夫だ希実香。ちゃんと聞こえてるからさ」

「だって遠くん、さつきから何も話さないからてつきり、また考え事でもしてると思っただけだ……ゴメンね。次からは気をつけるね」

「いや、別に希実香が謝る事でも無いと思っただけ……」

実際、希実香は俺のためにわざわざ肩を叩いてくれたんだし、感謝はしても謝られる事ではないと思う。

まあ、そんなところが希実香らしいって言えば希実香らしいんだけど。

俺はそんな感想を口には出さずに心の中にその言葉を留めておく。何故なら、直接伝えるのが気恥ずかしいからだ。

『遊園地前に停車致します、忘れ物の無いようお願いします』

そこで、今度は先ほどとは違って遊園地前の駅に付いたことを知らせるアナウンスが流れた。俺はこのアナウンスを聞いて、たまにだかと思う事がある。

それは、電車に流れるアナウンスって言葉は丁寧になっているが、どこか慇懃無礼に聞こえるという事だ。これだけはいくら考えても俺の主観でしかないので、これと言った答えが無いのが考え物だ。

「早く降りないと扉がしまっちゃうぞー」

「あ、やばっ!！」

既に電車から降りていた奏龍が、まだ電車の中に残っている俺に向かって軽く声を出している事に気がつき、俺は急いで電車を飛び降りる。

「今度は何を考えていたんだい？」

「いや、電車で流れるアナウンスについてちょっと考えてたんだよ」

「またどうしようもない事を……………」

俺が奏龍の質問に答えると、奏龍だけではなく希実香にまで苦笑いをされてしまった。

「あはは…………… 遼くんの考え事ってそんな程度の事ばかりなんだ」

「いや、待て。それは誤解だ希実香!! いつもそんなくだらない事ばかり考えているわけ無いだろ!？」

「あ、うん。分かってるよ……………」

希実香…………… そういうことはキチンと相手の目を見て言わないと説得力が無いぞ。そして奏龍、何故そんな目で俺を見るんだ？

「ま、まあ、遼の考え事なんて今に始まった事じゃないしさ……
取り合えず遊園地に入ろうよ」

「そ、そうね。今神くんの言うとおり早く中に入ろうね、遼くん」

ああ、これからは素直に思った事を口にするのはやめよう。そうだな『口は災いの元』とはよく言ったものだが、どちらかといえば『発言は災いの元』の方が俺には適しているような気がする。

だが、この場合に『正直者が馬鹿を見る』と言う言葉は適応されないのか、と言うことが疑問である。そもそも、俺が正直者に分類されるのが疑問だからだ。

それはさておき、これ以上長々と考え事をしていたら二人に何を言われたものがわからないので、そろそろやめるとしよう。

「りょーかい、分かったよ」

俺がそう答えると、二人は目と鼻の先にある遊園地の入り口に向かって歩き始める。若干だが歩くスピードに差があり、RPGで良く見る勇者ご一行のように縦のラインになって歩いているというのはシュールな光景だが……この際は気にしないで置こう。

しかし、俺が歩を進めるごとに遊園地の入り口付近に最近見た感じの人影が立っているように見える。

幻覚ではないかと目を擦ってみるが、やはりその人影は消えない。むしろ、こちらに気が付いたかのように手をぶんぶんと振っている

ようにも見える。

「なあ、奏龍……今日の参加者は三人だったよな？」

歩きながら先頭を歩いている奏龍に向かって、少し声色を下げて尋ねる。

「んー？ だつてホラ、チケットが折角四枚あるのに三人だけってなんか物足りなくない？」

「いや、言わんとしている事は理解できなくも無いが……俺の目が狂っているわけではないとすると、遊園地の入り口のところにいるのは羽も」

俺がそこまで言いかけたとき、ソイツは痺れを切らしたのかこちらに向かって走ってきていた。

「いまがみさん遅いですよー!!」

「やっぱり羽森結衣じゃねーかよー!!」

「あ、ささみやくんもいたですか」

「なんでお前がここにいるんだよ……」

俺に気が付いたように言う羽森結衣を見て、俺は意気消沈する。だつてそうだろう？ 出会った初日からあんな事があったんだから、学校ですら関わりたくないって言うのに、プライベートで関わりた

い訳がないだろう？

「遼くん、知り合いなの？」

そんな俺の姿を見た希実香が、疑問系で尋ねてくる。

そういえば、羽森結衣が転校してきた日に希実香は学校を休んでたんだよな。だったら知らなくても無理はないか。

「ああ……できれば一生関わりたくなかった人類だよ」

「ほお、遼くんでもそういうタイプの子がいるんだ……ちょっと意外だなあ」

「いや、アレはそういった括りではないんだ。もう、なんていうか……存在そのものが俺に対する悪意って言うか……」

希実香に何とか説明を試みようとするが、どうにも上手く説明ができない。そもそも、どうして俺はこんなに必死に担って希実香に説明をしているんだろうか？

全く理解できない……と言っわけではないが理解したくない。

「あの、いまがみさん。質問してもいいですか？」

「どうしたの結衣ちゃん」

「あちらの長身の女性はどなたですか？」

そして、羽森結衣と奏龍も俺達と同じような会話をしているところを見ると、奏龍は何も伝えていないという事がわかる。

しかし、奏龍が羽森結衣を誘う確率が無いわけではなかった。よく考えてみれば、昨日の放課後にはメールアドレスを交換していたようだったし、朝には良く似た人物を見かけたし………

「はじめまして、私は羽森結衣といます。よろしくお願いしますね」

と、そんなことを考えているうちに羽森結衣が希実香に手を差し出している。希実香はそれが自己紹介であることに気が付いたのか、差し出された手を握って同じように自己紹介をしている。

「私は絃城希実香って言うの。こちらこそよろしくね、えっと……」
「あ、好きなように呼んでください。私はきみかさんと呼ばせてもらいますので」

「じゃあ、よろしくね結衣ちゃん」

「はいー！！　よろしくです、きみかさん」

握った手をぶんぶんと振っている羽森結衣に、少し驚きながらもそれに合わせている希実香の姿。

何処からどう見ても中学生と高校生の構図に見えてしまうのは俺だけではないだろう。現に奏龍も俺に向かって耳打ちをしているくら

いだ。

「ねえ、こうしてみると希実香ちゃんがお姉さんで結衣ちゃんが三つしたくらいの妹に見えない？」

「ああ、俺もそう見えるから安心しろ。アレはどこからどう見ても中学生と高校生にしか見えない」

しかし、初めて羽森結衣に遭遇したあの日にファミレスで会話をしたときは、もう少しまともにアイツは話していた気がする。

だが、昨日といい今日といい、初めて遭遇した時の羽森結衣とはまるで別人のような話し方をしているということも事実だ。

しかし、その反面では性格そのものがほとんど変化していないように思う。この場合、初めて遭遇したときの羽森結衣という人物の印象は俺しか知らないのです、奏龍や希実香に聞くことは出来ない。

「え」

そして、本人に直接尋ねると言うことも出来ない。何故なら「なあ、お前って初めて会ったときと雰囲気変わってないか？」なんて聞いて見る。即座に笑われて終わるか、こいつ何言ってるんだ的な目で見られるに決まっているからだ。

「まーた考えごとお？」

そこで、俺の耳に奏龍の声が聞こえてきた。どうやら、俺はまた長い間考えごとをしていたようだ。

「悪い、ちょっと思ったことがあってさ。もう大丈夫だから中に入ろうぜ」

「そうだね、そうした方が遠の考える暇もなくなるだろうし、早速入ろうか。けどさ、希美香ちゃんと結衣ちゃんは一体なにを話しているんだろうね？」

俺の返答に奏龍は同意とともに、ふと思いついたかのように希美香と羽森結衣のいる方向を指さしながら、質問を追加して尋ねてきた。

「さあな、女の子同士の会話って長引くモノなんだろう？ まあ、確かに希美香がああ羽森結衣とどんな会話をしているかってのは少し気になるけどよ」

「んー、確かに僕が知る限りでは女の子同士の会話って総じて長いものだけどさ……まあ、それはどうでもいいとしてさ。遠が希美香ちゃんの事だけを気に掛けているってのは、たった今、改めて確認ができたよ」

奏龍は自分で聞いてきたことをどうでもいいと言ったあげく、何故か最後に納得のいかない言葉をつけて俺にそんなことを言ってくる。

「自分で聞いてきたことをどうでもいいとか言うなよ。そもそも、どうしてそんな結論に至った？」

「ほうほう、自分では自覚していないって言う辺りが、遠らしいって言えば遠らしいんだけどね……………はあ、こつ言った点では僕のほうがポイントは高いはずなんだけどなあ」

前半の方は納得いかないが、奏龍が言っているのだからそうなのだろう。だが、後半の方にボソツと呟くように言った言葉の意味が理解できない。

「僕のほうがポイントが高い」とか言っているあたり、奏龍と俺の間で、知らぬ間に何らかの戦いが起こり、知らず知らずのうちに俺が勝利していたのだろう。

だが、全く以ってわからない。そもそも俺と奏龍が競うような事は、高校に入ってからと言うもの、殆ど無かったように思う。

「はあ……………希実香ちゃんもどうして……………」

「希実香がどうかしたのか？」

俺が奏龍の呟くように漏らした言葉を聞き返すと、奏龍は妙に驚いているような表情をして言葉を返してきた

「い、いや、なんでもないよ。てっきり、また考え事でもしてるかと思っただけで、違っただけ……………もしかして全部、聞いていたりした？」

「全部って……俺が聞いたのは今の眩き程度だよ。そもそも、俺はドンだけ考え事してたんだか」

すると、俺の答えを聞いた奏龍はよかったと言つのように胸を撫で下ろすと、いつもの調子に戻つたような口調で話を始める。

「おおよそ10分くらいは考えてたよ。けど、その間の僕はどれだけ心寂しかったと思うんだい？」

「いや……そんなこと知るかよ」

それに対し、俺は話さなくていいというように返すと、奏龍はそれさえ無視して話を始めた。

「遼は考え事して自分の世界に入っちゃうし、希実香ちゃんと結衣ちゃんは遊園地に入る前に会話に花を咲かせちゃうし……四人いるのに僕だけが何故かハブられている気分だったんだよ!？」

しかも、最後に至つては完全に言い掛かりだ。俺の場合は無視したくて無視していたわけではなく、完全に考え事をしていたために起きた偶然だ。

「さて、いつまでも遊園地に入らないつても時間の無駄だな……」

…奏龍、あの二人の会話を終わらせて中に入ろう」

「え、僕の話は無視？ 無視なの？」

奏龍は自分の話を無視された事が気に食わないのか、俺にしつこく問いかけてくる。だから、俺もそれを一撃で黙らせるために言う

「そもそも、俺はさっきも同じことを言った気がするんだが？」

「うっ……」

俺がそういうと、奏龍は呻くように声を漏らすと黙ってしまった。どうやら、自覚はしていたようだ。

「そんじゃ、行きますか」

「うん……そうしよう」

意気消沈。そんな言葉が奏龍の頭上に降り注いでいるかのような錯覚を覚えるが、この際は気にしないで置こう。

そして、俺は少し離れたところで会話に花を咲かせている二人に向かって声を出した。

「希実香ー、羽森結衣ー！！ そろそろ遊園地に入るぞー。話はそれからでも遅くないだろー？」

希実香は俺の声に気が付いたのか、羽森結衣に何かを言ってこちら

に向かって走ってくる。同じくして、羽森結衣も希実香の後ろを追う様に走ってきている。

「どーして、私だけフルネームなんですかぁ!？」

だが、羽森結衣だけは何故か俺に向かって文句を言いながら走ってくる。しかし、そんなことで慌てる俺ではない。

「へっ?」

隣で未だに意気消沈状態の奏龍の腕を引っ張り、走ってくる羽森結衣のほうに軽く押す。

「あわわわっ、い、いまがみさん、危ないです!!」

すると、奏龍は咄嗟の事に身体は流され、羽森結衣は加速を止められずに奏龍に直撃する。

擬音で表現するなら”ごっつーん”なんていう表現がぴったりだな。

「イタタタタ……いきなり何するんだよぉ」

「だ、大丈夫ですか、いまがみさん!!」

だが、やはり予想通りと言つべきか、奏龍は転ぶ瞬間に羽森結衣の身体を包むように受け止め、身体にダメージを受けないように受身を取っていた。

それは、有段者であつてもそう簡単には真似できないほどに綺麗な動き。洗礼された動きには美しさすら感じる。

「よし、なんだかんだ在つたけど全員揃つたし、入園しよう」

「遼くん、今は奏　　今神くんじゃ無かつたら怪我してたかもしれないよ?」

一瞬だが、希実香が奏龍と名前呼びかけたが、すぐに訂正して、俺を咎めるかのような目で見てくる。

俺は、そんな希実香の眼力に負け、しびしびになるが、コンクリートの地面に座る形になっている奏龍に手を貸す

「悪かつたな、奏龍」

「本当に悪いと思つてるんだつたらさ、一つ頼まれてくれない?」

「そこに居る羽森結衣についての頼まれごとならすべて拒否するぞ」

俺が真面目な顔をしてそういうと、羽森結衣がマシンガンのように言葉の雨を俺に降り注がせる。俺は涼しい顔をして、それを無視しながら奏龍の言葉に耳を貸す

「そうじゃないよ、頼みって言うのはね

」

「はあ？ そんなことでもいいのか？」

「その返答は了解ってことでいいのかな？」

「いや、良いも何も……本当にそんなことで良いのか？」

俺が再度聞き返すと、奏龍は首を縦に振るだけだった。

「りょーかい、確かに頼まれたよ」

俺がそう答えると、奏龍は俺の手を取り、静かに立ち上がった。

「よし、早速入ろうか」

「そうだな」

その短い会話の後、俺と希実香、そして奏龍と羽森結衣がペアになって遊園地に入園するのだった。

さて、今日はどんな一日になるのだろうか……

第一章・幻想 その終わり

遊園地に入るなり、俺と奏龍は別行動をとることに決まった。二人一組で行動するという計画になり、俺と希実香のペア、もう一組は奏龍と羽森結衣となった。

何故、二人一組のペアで遊園地を行動しなければいけないかという理由は、建前として奏龍曰く「そのほうがデートっぽいから」らしい。

だが実際には、先ほどの奏龍からの頼みごとが、俺に希実香と二人で行動してほしいというものであったというほうが答えとしては正しいだろう。

俺としては、奏龍の頼みには何の意図があつての事は全くわからない。だが、頼まれた事に対して、引き受けるってしまった以上は、最後まで遣り通す。

「希実香、どこかいてみたい場所とかはないか？」

俺からの突然の問いに、希実香は多少も焦る事はなく答えた。

「その前に、入場時にもらったパンフレット見ようよ。そのほうが、行きたい場所とかもすぐに決まるよ?」

そういつて、希実香は上着のポケットから二つに折りたたまれたパンフレットを取り出す。ちなみに、どうして俺が持っていないのかと聞かれれば、貰ったと同時にゴミ箱に投げ捨てたからだ。今思ふと、どうして捨ててしまったのだろうかと考え物だ。

「……………そうするか」

「じゃあ、あそこのベンチに座って見ようね」

希実香はそういいながら、直ぐそばにあるベンチを指差している。俺はそれを確認すると、希実香と一緒にベンチに向かって歩く。

「そういえばさ、俺と希実香が二人で歩くって久しぶりだよな」

その途中に、俺は昔の事を思い出しながら希実香にそう言う。

「そうだね……………小学校の頃は、よく一緒にこうして並んで歩いてたよね」

希実香は俺の言葉に苦笑いしながらも、言葉を返してくれた。

「まあ、あんまり昔の事は話すことでもないか……………悪かったな、希実香」

「うつん、全然平気だよ……………それに、本当に辛い事があったのは遠

くんじゃない……………」

「辛い事…か。別に希実香が気にする事でもないさ。あれは事故だったんだからさ」

俺が自分で話し出したことだというのに、うまく言葉を返せていない自分に失望する。これじゃあ、希実香に心配を掛けるだけだ。

「そうかな……だって、あれは私が」

「そうじゃないだろ、あれは事故だったんだよ。希実香は何も悪くないし、あの事故は誰も悪くないんだ」

俺は、悲しげな目をしている希実香に自分の意思を伝える。そもそも、あんな事故は存在していないのだ。存在し得なかった事を誰のせいにできようか？

「そう…だね。そうだよね、あれは事故だったのよね」

俺の言葉を聴いて、希実香は自分に言い聞かせるようにそう呟くと、いつもの希実香の表情に戻り、直ぐ目の前にあるベンチに座った。

俺も希実香の隣に座るように、ベンチに腰を下ろした。

「さて、さっきの話はなかった事にするとして……どこに行こうか？」

俺は希実香が広げているパンフレットの中身を覗き込みながら、

そう呟く。希美香はすでに、行きたい場所が決まったのか、パンフレットのある一点を、沈黙を守ったまま見つめている。

そのアトラクション施設の名前は『鏡の迷宮』

俗に言う、ミラーハウスにあたるアトラクション施設なのだろう。その部分を希美香は凝視している。俺としてもミラーハウスというアトラクションは、遊園地にある絶叫マシンよりも興味を惹かれるモノだ。

この歳にして、このような思考なのは、爺くさいと言うよりは落ち着いているのだと評価してもらいたい。それにとりわけ絶叫マシンは苦手ではないし、嫌いでもない。だが、絶叫マシンとミラーハウスのどちらを選ぶかと聞かれた場合はミラーハウスを取るというだけの話だ。

「俺としては『鏡の迷宮』って言うのが気になるんだけどさ、希美香はどうだ？」

間違いないく同意をしてもらえるところだが、一応確認を取っておく。「よかったあ、私もそこが気になってたの。けど、遼くんは絶叫マシーンとかの方が好きそうだったから……少し意外だなあ」

「事実嫌いじゃないしな。けど、このアトラクション施設が気になったから選んだだけだよ」

俺は簡単に、正直に思った事を希美香に答えた。

「それじゃ、早速言っって見ようよ!」

「そうだな。俺も気になっていた所だし、早速向かおうか」

そういって、俺はベンチから立ち上がる。希実香はベンチから立ち上がるとついでに、広げていたパンフレットを再び二つに折りたたみ、上着のポケットに入れた。

そして、俺たち二人はこれから見に行く『鏡の迷宮』がどんな所なのかと言う話をしながら、隣に並んで歩く。

そうして、歩く事数分でアトラクション施設『鏡の迷宮』の前まで俺たちは来ていた。その外観は、西洋の古城を思わせるような造りをしており、内部がどのようになっているのかが、容易には予想がつかないものだった。

その事に、俺と希実香はほぼ同じタイミングで「おおー」と言った、関心の声を漏らしている

「まさか……この遊園地にこんな施設があったとは……」

「いい意味で期待はずれだったね……」

このような外装の、ミラーハウスを今までに見た事がなかったために、期待が高まる。

「確か、奏龍から貰ったチケットがアトラクション施設のフリーパスになってるんだよね？」

「えっと、チケットの裏にもフリーパスになるような説明もあるし、そうだと思うよ」

希実香はチケットの裏面にある、細かな説明を読みながら質問に答えた。

「だったら早速、中に入るとしますか」

「どんな感じなのか楽しみだね、遠くん」

ぱたぱたと手を振りながら、希実香は俺にそう答える。その姿は、三人で名前を呼び合って遊んでいた、あの頃を思い出させるものだった。

少しだけだが、この場に奏龍がいないことを残念に思う。奏龍ならば、今の希実香と同じように笑い、俺すらも笑顔に変えてくれただろう。それを、本当に少しだが残念に思う。

「あつ、受付が直ぐそこに見えるよ!」

深く考えかけていた俺の思考を、現実に戻すかのように、希実香の声が俺の耳の中に聞こえてくる。

「それじゃ、受付を済ませますか」

「そうしよう」

俺たちは今の言葉を合図に、二人で並んで受付に向かう。もしも、隣に並んでいる人物が羽森結衣だったらと思うと、その途端に寒気を覚える。

そういつた点で、希実香はとてもいい女性だと思う。人のことを考えられ、自分の意見を蔑ろにする事も無く、なにより人として他の人間を寄せ付ける何かを持っている。

「どうしたの、遼くん？」

そんな俺の視線に気がついたのか、希実香は不思議そうに俺を見ながら聞いてくる。どうやら、自分ではわからないほどに希実香のことを見つめてしまっていたのだろう。

「いや、別になんでもないさ。悪かったな、急に顔を眺めてさ。嫌だったろ？」

「ううん、別にそんなこと無いよ。知らない人だったら嫌だけど、遼くんだもん」

少し顔を赤らめながら、そういう希実香の顔を見て俺は思った。こういうことをリアルで言われると、言った本人は当然のこと恥ずかしいのだろうか、言われた方も結構恥ずかしいものということだ。

お互いに、よく分からないダメージを受けて赤面しながら、俺たちは『鏡の迷宮』の受付を何食わぬ顔で済ませ、中に入った。

中に入る前から、俺と希実香の興味を引いていた、この『鏡の迷宮』と言う施設は、中に入ってから俺たちを飽きさせるような内装をしていなかった。大抵のミラーハウスは、進む道が分かりにくいように設計されている場合がほとんどだが、この『鏡の迷宮』と

いう名のミラーハウスは、それらのミラーハウスとは違い、床に矢印を引いて進む方向を分りやすくしている。

遊園地の設計者の多くは、ミラーハウスはお化け屋敷と同類視している者が多いらしい。お化け屋敷ならば、怖がらせると言う概念で合っているのだろうが、ミラーハウスそうではないのだ。

その、迷路のような道を作るために設置された大量の鏡は、幻想的な空間を作り出すためにあると俺は考えている。だが、実際にそのような造りをしていたミラーハウスにこれまで出会ったことは無く、その思いも最近になっては消えかけていた。

しかし、このミラーハウスのおかげで、ようやく思っていたものと同じミラーハウスに出会うことができた。

美妙な光度を放つLEDの人工的な輝きが、薄暗く染まっている館内を怪しく照らしている。そして、無数に枝分かれした行き止まりの道の先には、入場者を退屈させないように何らかの芸術品が飾られている。それは絵画であったり、人形であったり、石造であったり……その手のことに詳しくない人間でも、素直に美しいと思えてしまうようなモノばかりが飾られている。

そんなことを思いながら歩いている俺の隣で、希美香は声を漏らしていた。

「凄く綺麗だなあ」

俺も言葉で感想を述べたのならば、その一言しか出てこないだろう。本当に良いものには、長い言葉なんて必要ないのだから。

「最初にここに来て正解だったな……」

俺も、ぼそりと呟くように言葉にする。だが、その呟きは希美香に聞こえていたようで、希実香は返すように言葉を放つ。

「うん、私もそう思うよ」

そんな希実香の言葉聞き、表情を見て、俺は自分の中にある一つの感情に気付いてしまった。その感情は誰もが抱くような感情。俺はそれを気付かないフリをして見過ごしてきた。だが、気付いてしまえばそれは意識せざる終えなくなる。

ああ、俺は希実香のことが好きだったのか……

この感情を希実香に伝えたらどうなるのだろうか？ 希実香は俺を受け入れてくれるだろうか？

もし、この思いを受け入れられなかったとしても、希実香は今までと変わらずに接してくれるだろう。だが、それはあくまでも俺の想像でしかない。

「ん？」

だったら、失敗を恐れずにこの思いを伝えるのは無謀なのだろう。

「くん？」

その時、一つの物語が頭の中に浮かんできた。それは『ジャバウオックの詩』と呼ばれる英語で書かれた最も秀逸なナンセンス詩であると言われるものだ。

しかし、俺はそうは思わない。あの詩はきつと、誰もが物語の主人公になれるということを伝えたかったのだと思う。

だったら、失敗を恐れればかりではいられない。物語を進めたいのなら、まずはその物語の主人公にならなければならない。

しかし、俺が主人公になる資格はあるのだろうか？ 過去に、事故だったとしても、あのようなことを起こしてしまった元凶である、この俺に……

「具合でも悪いの？ 顔色悪いよ……」

再び、希実香の顔を見ると、俺に向かって何かを喋っている希実香の姿が目映る。

ああ、また俺は思考に囚われていたのか……

「悪い…少し考え事をしていたみたいだ」

きっと、この返答は会話と噛み合っていないのだろう。だが、俺にはそう答えるしか出来ない。これ以上の関係を望んでしまう事は、俺には身に余る事だから。

「……………どうして?」

「えっ?」

しかし、返ってきた言葉は理解できないものだった。

「……………どうして遠くんは自分を許してくれないの!？」

「何を……………言って」

だから、その言葉に答える事もできぬままに希実香の言葉が俺に突き刺さる。

「確かに……………遠くんはやっちゃいけない事をした。だけど!！」

その声は嗚咽のようで、慟哭のようで……………何故か分からないが、

希実香にそんなことを言わせている自分が許せなくなる。

「あれは事故だったって、自分でも言っていたじゃないの！！それに、由岐ちゃんと涼香姉さんを守るためにやった事じゃない！！それをどうして」

それは過程を知っている人間にしか言う事のできない言葉だ。事実を知らない人間は、俺を　犯と呼ぶ。

だが、希実香と奏龍は俺をそう呼ぶ事はなかった。俺は、それを同情の一種だと思っていた。

「それでも、俺は」
「もう、許してあげてよ……辛いのは遠くだけじゃないんだよ……奏君も、私だって辛いんだよ……お願いだから……許してあげようよ、自分を……十分、苦しんだじゃない……」

俺と希実香しかない『鏡の迷宮』に、泣き声が響き渡る。その泣き声は俺の出しているものではない。泣いているのは希実香だった。どうして希実香がなくなるのだろうか？

本当は分かっている。ただ、知りたくなかったただけなんだ。

だから俺は逃げる事を選んできた。

そうする事が、奏龍と希実香に迷惑を掛けない方法だと思

い込んでいたから。

「なあ…希実香。俺はさ、本当に自分を許してもいいのかな？ 涼香姉さんも由岐も、それを望んでくれるかな？」

俺は……幸せを望んでもいいのかな？

たった一言、たった一言を聞くことができなくて今まで苦しんできた。それに対する答えを希実香が教えてくれる。許してくれる。それが堪らなく嬉しい。

「遼くんは十分苦しんで償ったよ。涼香姉さんも由岐ちゃんも望んでいるはずだよ……だから」

「許す……か。だったらさ、俺は幸福を望んでもいいのかな？」

ぼそりと口からこぼれた言葉。それに対して、希実香は首を縦に振ってくれた。

「ありがとう……希実香。だったら言っよ、俺の気持ちを……」

「気持ち……？」

だから、俺は気付いてしまった思いを希実香に告白しよう。

希実香がどうしようもなく愛おしくて、今すぐにも笑ってほし

くて、強く抱きしめたくて……

「好きだ、俺はお前のことが好きだ……だから、付き合ってくれ！」

それが、俺の幸せの形だから。お前がいてくれる、それだけで満足だから。

「そんなの……卑怯だよ……だって、私のほうがずっと前から……
遠くのこと大好きだったんだから……だからね、私から聞かせて……
本当に、私でいいの？」

何を迷うことがある？ 何をためらうことがある？ そんなこと
考えるまでも無い。もう、俺は自分を許すことができたから。

「何度だって言ってやるよ。希実香、俺はお前のことが好きだ。お
前のこと、もう泣かせたりしない」

泣きじゃくる希実香を、そう言って強く抱きしめる。

「……ありがとっ、遠くん。私……今、とっても幸せだよ」
「俺も同じ気持ちだよ……ありがとっ。許してくれて……許させてく
れて……」

希実香も、俺のことを優しく抱きしめてくれる。

今回の、俺の物語は三日前に始まって今日で終わった。

満たされることが、自分を許すことが、俺がこの世界で機械仕掛けの神、デウス・エクス・マキナが望んだことだから。幾度と無く繰り返して、ようやく手に入れることができた夢の完成形だから。

ありがとう、素晴らしき繰り返しを。

ありがとう、幸せな夢を。

ありがとう

徐々に意識が薄れ始める。今まで訪れることの無かった夢の終わり。ようやく手に入れた幸せな夢。だけど、俺は眠ってはならない。目覚めなくてはならない。この世界ではない、あの世界で待つ二人と再会を果たすために。

だから気付けた、夢は夢であると。

機械仕掛けの神は必要ないと。

デウス・エクス・マキナは必要ない

俺は幸せな夢を望んだ。そして、結末は幸せなものであった。だが、それは俺だけの幸せである。

だから戻るんだ、あの世界に

第一章・境遇（主人公・笹宮遼） END

第一章・幻想 その終わり（後書き）

次章予告 第二章・契約（主人公・今神奏龍）

ある日のこと、今神奏龍は親友の眠る病室で絃城兄妹と二年ぶりの再会を果たす。

そこで、絃城兄が言う 俺達の時間も、こいつと一緒に止ま
つちまつたんだな

次の日、奏龍が通う学校を中心に、ひとつの噂と共に不穏な空気が流れていた。

『隣の進学校で、絃城と言う女性徒が誘拐されたらしい』

その日から、止まっていた時間が狂いながら進み始める。

今神奏龍と言う少年の日常を狂わせながら。

一章・追加資料（前書き）

一章完結にあたって、DEMの初期キャラクター設定を追加記載させていただきます。

一章・追加資料

キャラクター設定（一章の）

一章・主人公 笹宮遼

第一章の主人公。現在は文武両道をモットーとしているが、つい最近まではDQNだった学生。自らの過去を黒歴史と称し、過去を悔いている。性格はマイペースな不器用さん。

身長180・7cm 体重64キロ 黒髪短髪の端正な顔立ち

笹宮 涼香

主人公の姉。物凄く落ち着いた印象を与えてくれるが、その実は下ネタ好きなお姉さん。若干ブラコンとシスコンに目覚めつつある。

身長168・5cm 体重46キロ 黒髪長髪で若干ウエーブ気味

笹宮 由岐

主人公の妹。姉とは違い明るい活発的な印象を与えてくれる女の子。得意な事は家事全般らしいが、何故か料理の腕だけは壊滅的に悪い。姉や兄との仲は良好なようだ。

身長158・9cm 体重38キロ 黒髪短髪でくせっ毛

今神 奏龍

主人公の友人Aであり親友。おちゃらけた性格でありながらどこか憎めないそんな奴。人の気持ちを汲んで行動できるナイスガイ。

身長176・8cm 体重58キロ 若干茶色の掛かった黒髪のおく

せつ毛

絃城 希実香

主人公と奏龍のクラスメイトの女の子。密かにだが主人公に想いを向けている。繰り返しの閉ざされた世界から主人公の精神を解放するために行動を起こす。何故か奏龍とは仲があまり良くないようだ。

身長162・6cm 体重45キロ 茶色の短髪

羽森 結衣

機械仕掛けの神の言葉を代弁するもの。主人公と無理矢理フラグを建設した少女。見た目は主人公曰く小学生が良いところ中学生らしい。性格はマイペースであり脈絡が全く無い。

身長159・4cm 体重41キロ 茶色の長髪 ストレートヘア

水上先生

主人公達の担任。綺麗らしい。竹を割ったような性格をしており、プライベートは謎に包まれている。生徒間の噂で医者もしているとかなんとか……

身長178・2cm 体重は秘密 赤みの掛かった茶色 セミロング

一章・追加資料（後書き）

次章もよろしくお願いします

第二章・英雄 その一（前書き）

これは、もう一人の英雄ヒーローになる事の出来なかった少年の分岐点

たった一つを間違えてしまっただけで、救いから破滅に変わる物語

少年は、いつまでも親友を待ち続ける

第二章・英雄 その一

二月十四日

私立高校の入学式まで約二ヶ月と迫った中学校の卒業生に与えられる、準備期間と言う名の長期休みを使って、僕は親友である少年の病室に足を運んでいる。その少年は中学一年の冬から一度も目を覚まさない。

その親友の名を笹宮遼と言う。

遼のかかりつけの医者である水上先生からの説明では『身体の傷は全て完治しており、いつ目を覚ましてもおかしくない』という状況であるとの事だ。しかし、水上先生は「だが……」と口を閉ざした後に、こう言ったのだ。

『確かに彼の身体の傷は完治している。だがな、問題なのは彼の心が死んでしまっているかもしれないということなんだ』

その言葉を聞いたとき、僕はどうしようもない喪失感を覚えた。親友が二度と戻ってきてくれないかもしれないという、絶望から来る喪失感を。

しかし、その喪失感も水上先生が次に放った言葉によって消えてくれた。

『しかし、彼は恵まれているよ。こうして心配をしてくれる人間が、本当の家族以外に三人も居るんだからね。絃城兄妹、そして君だ』

遼がこんなになってしまってから、一度も顔を合わせなくなった絃城兄妹も僕と同じように、遼のお見舞いに来ているという事実のおかげで。

『だからね、彼が目を覚ました時は君達が彼を支えてやってくれ。私も彼が目を覚ましたら、この仕事をやめて彼の里親になろうと思っ
っているんだ』

だから僕は、目を覚まさない親友のために病院に足を運んでいる。他の誰よりも早く、遼に「おかえり」と言っ
てやるために。

しかし、今回のお見舞いはいつもとは違った。いつもならば閉じられて
いるはずの病室の扉が開いており、中から男女の話し声が聴こえた。

そのことに、若干驚きながらも病室に足を踏み入れる。しかし、病室
の中に居た人物の顔を見て、僕は目を疑った。

普段なら絶対に遭遇しないはずの時間を選んで、この病室に来て
いたというのに……そこには絃城兄妹の姿があったのだから。

「久しぶりだな……奏龍」

僕が病室に入ってきたことに気が付いた絃城兄……恭介さんは、
目を合わせずにそう言った。

「ええ、本当に久しぶりですね……恭介さん」

本当なら殴ってやりたかった。涼香姉さんの一番近くに居たくせに、一番大事なときに近くに居てあげなかったこの人を。だけど、それを言うのなら僕も同じだ。僕を慕ってくれていた由岐ちゃんを助けてあげられなかったこの僕も……

きっと遼は僕等を怨んでいるだろう。人一倍、自分のことよりも姉妹を大切に思っていた遼だから。

「あれ……奏くん？」

僕が自己嫌悪に陥りかけた瞬間、希実香は僕に気が付いたのか、僕の顔を見ながらそう呟く。そして、病室に飾っている花瓶と僕を交互に見て、一人で納得したというように言うのだ。

「そっか……やっぱり奏くんだったんだね……」

「希実香ちゃん、何が『やっぱり』なの？」

「うっん、毎週此処に来るといつも花瓶に花が挿してあったから……薄々だけど、そうじゃないかなって思ってただけだよ」

それはそうだろう。僕は毎週欠かさずに、土日のどちらかに此処に来ていたのだから。

さて、希実香は今なんと言った？

「もしかして……二人も毎週この病室に来てたの？」

僕は一度も気がつかなかった。絃城兄妹もお見舞いに来ているということは、水上先生から聞いているから知っていた。だが、僕と同じように毎週、此処に来ているとは知らなかった。

「うん。私は毎週、お兄ちゃんも涼香さんのお墓参りと重ならない日以外は毎週来ていたよ……それに、『二人も』って事は、やっぱり奏くんも来てたんだね」

「そうだったんだ……恭介さんも来てたんだ」

僕が、希実香の言葉を聞いてそう呟く。すると恭介さんは、やはり僕とは視線を合わせずに、窓の外を見るように背を向けてしまった。

「そうだよ……。可笑しいよね、昔はいつも六人一緒だったのに。今はこんなにすれ違ってばかり……。どうしてだろう……。どうしてこんな風になっちゃった……。のか……。な？」

希実香の声は終わりの近くでもはや泣いてしまっていて、声になっ
ていなかった。それに、希実香の問いに僕が答えられるような答
えは持っていない。

僕にだってわからない。あの頃の六人の内、二人は永遠に戻ってこない人になってしまった。そして、もう一人は今も病室のベットの上でこうして眠って居る。

できることならば、あの頃に戻ってやり直したいとすら僕は考えたことも在った。

だけど、そんなことができるはずも無い……

「なあ、奏龍……一つ聞いてもいいか？」

そんな時、不意に恭介さんはこちらを振り向かないまま、そう尋ねてきた。

「……………」

僕は無言を持って返す。それが、僕たち六人の中に在った了承の合図。もし、恭介さんが覚えているなら話を続けるはずだ。

すると、恭介さんは消え入りそうな声で「ありがとうな、奏龍」と小さく呟いてから、僕に同意を求めるかのように言ったのだ。

「俺達の時間も……こいつと一緒に止まっちまったんだな」

その言葉は、やけに耳に残った。絡みつくように、粘つくように頭の中で何度も何度も繰返される。それが意味することはつまり……

「だから、止まった時間は進めないといけないんだよ……急にこんなこと話して悪かったな……希実香、俺は先に帰るよ」

「うん、私ももう少し奏くんとお話してから帰るから」

「ああ、先に家で待ってる……」

そう言い残すと、恭介さんはスタスタと歩いて病室を出て行った。僕と希実香と遼を残して……

そして、僕と希実香は顔を合わせると沈黙に陥ってしまった。先ほどまではそれなりに話すことができていたというのに。そして、数分ほど時間が経った後に、希実香はその口を開いた。

「ねえ、奏くん……きっと遼くんは目を覚ますよね？」

「……………」

希実香の問いに、僕はすぐに答えることはできなかった。確かに、遼には早く目を覚ましてもらいたい。だが、それは僕の希望であり答えではない。

「……………わからない。けど、きっと遼は僕や恭介さんを怨んでる……あんなに近くに居たのに、僕たちは誰も助けてあげられなかったから

「違うよ!! 遼くんは……誰も怨んでなんか無いよ……」

俺の言葉を聞いた希実香は、半ば遮るようにそう言った。

「どうして……どうしてそう言えるんだよ!？」

「遼くんは誰かを怨んだりするような人じゃないよ……もし、遼くんが怨んでいる人が居たら、それは遼くん自身だよ……」

「希実香……?」

「だって……遼くん、あの時自分のこと責めてた。一番近くに居た自分が助けてやれなかったって……あの事件は、私たち六人は何も悪くないのに……」

希実香はそこまで言うと足元に置いてある鞆を取り、中身からごそごそと何かを取り出す。

「だから、遼くんは自分を許して欲しいの。奏くんも、自分を責めないで……」

それは、綺麗にラッピングをされたハート型の小さな箱だった。手に持ったそれを、僕の手には半ば強引に持たせる。その時、僕の手に触れた希実香の手の平は温かかった。それは、長い間忘れていた他人の温かさだった。

「希実香、こつう綺麗なラッピングをしたの他の男子にあげると勘違いされるぞ?」

「大丈夫だよ。私がある相手はお兄ちゃんと遼くんと奏くんだけだから」

微笑むようにそう言ってから希実香も病室を出て行った。

結局、最後まで残ったのは僕と遼だけ。いつもと変わらない

いや、ラッピングをされたハート型の小さな箱が置いてある。

「遼……僕もそろそろ行くよ。次に来る時までには起きててくれよ……」

僕は小さくそう言ってから、花瓶の花を新しいものに入れ替え、帰ることにした。

帰り道、希実香から貰ったチョコを食べたら苦かった。きっと、甘いはずなのに苦かった。まるで、今の僕の気持ちを表しているかのようだ……

第二章・英雄 その二

高校の入学式を終え、これから一年間をともに過ごすクラスメイ
トたちと顔を合わせることもなった。今の時代も昔の時代も変わら
ずに、名簿に記入されていく順番はアイウエオ順である。つまり、
自己紹介は早めに終わった。

だが、そんなことはどうでも良かった。自分の自己紹介など、他
人に対する第一印象を左右するだけのものだから。

だけど、そんな自己紹介でただ一人だけ、僕は気になった人物が
いた。

「 中学出身、羽森結衣です。これから一年よろしく願いま
す」

たったそれだけの自己紹介。他の人と何一つ変わらない言葉だっ
たが、何故か彼女だけが僕の印象に深く残った。別に容姿が他の女
子と違ってズバ抜けて可愛いわけでも綺麗なわけでもない。

だけど何故か、彼女とは初めて出会ったという感じがしなかった。

その後も残った数人が自己紹介を着々と済ませ、クラス全員の自
己紹介は終わった。その後に関しては、特に何事も無く時間が過ぎ
たと言つことはできない。

そして正午。

入学式と言うことだけあって、午後になる前に下校となった。クラスメイト達のほとんどはホームルームが終わると同時に、中学時代の友人だと思われるもの同士でクラスから去っていった。それでも、数人の生徒は残っていた。

あるものは担任の先生と話をしている。また、あるものは時計の針を見つめている。そんな中に、彼女：羽森結衣の姿はあった。

彼女は何をするわけでもなく椅子に座っている。僕は、それをちようどいいと思った。

「羽森さん…だよな？」

僕がそう話しかけると彼女はゆっくりと身体をこちらに向けて答えた。

「はい、そうですよ。それと、そんな貴方は今神奏龍さんで良かったですか？」

「うん、それであってるよ。それと、僕のことには苗字でも名前でも好きなほうで呼んで良いから」

「そうですか…：それじゃ、今神さん。私のこともどうぞお好きに呼んでくださいな」

「それじゃ、結衣ちゃんが良いかな？」

「はい、問題ないですよ」

一通りの挨拶のような会話が終わると、彼女はにっこりと笑って返してくれた。その笑顔も何故か、初めて見る気がしない。

「それで、私に何か用事でも？」

そこで、あらためてといった風に聞き返された。

「あ、そうだった。あのさ結衣ちゃん、こんなこといきなり聞くのって失礼だと思うけど……今までにどこかで会ったことって無いよね？」

先ほどまで感じていた疑問を直接本人に尋ねる。最悪の場合、ナンプカと思われて口をきいて貰えなくなるかもしれないリスクはあるが、背に腹は変えられない。

「今まで……ですか。それは、本当に貴方の記憶ですか？」

すると、意外なことにまともに返答が帰ってきた。しかし、その返答の内用事態はおおよそ理解の範疇は超えていたけど。

「本当の僕の記憶……？ それって、どういうことなの？」

「あつ、分かりにくかったですよ。じゃあ、『いまがみ』さん

今の呼び方に何か感じるものはありませんでしたか？」

瞬間、ドクンと心臓が躍動する。先ほどとまでのしっかりとした呼び方とは違って、どこかしたっただけな呼び方に妙な違和感を覚えた。

「……そうですか。やはり　　　ているんですね……」

そんな僕の表情を見てか、彼女は何かに納得したように呟く。その言葉の意味は、僕には全く理解できない。

心臓を得体の知れない痛みが襲う。まるで、何かを思い出させることを拒んでいるかのようにズキズキと頭も痛み始める。

「しかし、これは　　　に無かった　　　ですね」

時折、彼女の言葉が一部聞こえなくなる。その単語を僕に聞かせないように。

「って……今神さん？　随分と顔色が悪いようですけど……大丈夫ですか？」

そこで、ようやく呟くような彼女の言葉からはっきりとした言葉に変わった。だが、先ほどの質問に対する答えは返ってきていない。

「大丈夫だよ……それでさ、結局なんだけどさっき質問の答えは教えてもらえないのかな？」

だから、多少の心臓を襲う痛みや頭痛は、この際無視して先ほどの質問に対する答えを催促する。そうしなければ、この後に答えを聞くことはできない気がしたから。

「そうですか……では、もう一つだけ私の質問に付き合っては貰えませんか？ それに答えて貰えれば、私からも先ほどの質問に対する答えを話しますから」

僕はその言葉に無言で頷いた。

「では、今神さん。『デウスエクスマキナ』とはご存知ですか？」
「僕が知るものと結衣ちゃん知っているものに相違がなければ知っているはずだよ」

「それは、解決の困難な物語に現れる絶対的な力を持った神であり、混乱した状況に解決を下して物語を収束させると言うものですか？」

彼女の説明してくれたものと、僕が思い浮かべたものに相違がなかったために再び無言で頷く。

「今神さんが考えたことは半分正解で半分間違っています。それは古代アテナイの三大悲劇詩人の1人、エウリピデスが好んで使用した技法の一つに過ぎません」

「それじゃ、結衣ちゃんが言う『デウスエクスマキナ』ってなんなの？」

僕は思ったままに疑問を言葉にして尋ねる。

「私が言う『デウスエクスマキナ』とは『悲劇を回避するモノ』です……どうですか、何か思い出しませんか？」

瞬間、今までに経験したことの無い映像が頭の中に流れた。

ある映像では、高校の制服を着た僕と中学校の制服を着た由岐ちゃんが、遼と涼香姉さんとテーブルを挟んで会話をしているシーンがある。

また、ある映像では遼と僕が高校に通うために笑いながら通学路を歩いているシーンがある。

また、ある映像では僕と彼女が楽しそうに会話をしている。

「なん……なんだ？」

今度はテレビに映像が映っていない時に流れる、砂嵐が吹き荒れ

た。

次に見た映像に僕は言葉を失った。

好きだ、俺はお前のことが好きだ

それは、遼が希実香に告白をしているシーンだった。

「結衣ちゃん……今の……何だよ……？」

「それはいずれも『望まれた』貴方の記憶と、彼が……笹宮遼が『望んだ』世界の貴方の記憶です」

それを言う彼女の表情から嘘をついているとはとても思えなかった。

しかし、現実になんかことが在り得ていいのだろうか？

「認めるも認めないも今神さん、貴方の勝手です。ですが、私が接してきた『いまがみさん』は、この事実を知ってすら私と仲良くしてくれました」

そう言って、彼女は机の横にかかった鞆に手をかける。

「貴方の質問に対する答えは、おおまかに答えるのなら『YES』です」

そして、そういい終わると椅子から立ち上がると、教室の出入り口にあたるスライド式のドアに向かって彼女は歩く。

「そうでした……私は大事な事を伝えるのを忘れていました」

だが、何かを思い出したのかそう言ってドアの手前で立ち止まった。

「“デウスエクスマキナ”はあるべき世界を望んでいます……貴方も、彼と同じように正解にたどり着くことを祈っています。では、また明日。今神さん」

その言葉を最後に、彼女はそのまま帰ってしまった。

しかし、最後の言葉はどういう意味なのだろうか。全く理解ができない……だが、ついさっき僕自身に起きた出来事は、経験をしたことによって事実となった。

それは、別の自分だった者たちの記憶のフラッシュバック。

「……………俺も帰るかな」

とにかく、今日起こった出来事は複雑すぎたのだ。理解に苦しむほどに難しい、そんな一日だった。だから、今日はひとまず家に帰って落ち着こう。

そして、それから今日を振り返ろう。

きっと、その方がより良い思考に至る事ができるはずだから……

第二章・英雄 その三

六月七日

あれから今日で、ちょうど二ヶ月が過ぎた。入学式からこの二ヶ月間、彼女はなんら変わりなく学校に登校していた。僕を遠ざけるようなこともせず、学校に来るといふ役目を果たすためにだけに学校に来ているのだという印象を僕に与えた。

そういう僕も今までのように土日には遠のお見舞いに行き、なんら変わりのない日常を過ごしてきた。

だが、二つだけ変わったことがあった。

『なあ、今神くん。絃城兄妹と何かあったのかい？』

それは水上先生から突然、質問されたことであつた。しかし、全くもつてと言うほどに心当たりはなかつた。そもそも、最後に会つたのは久しぶりに会話をした二月十四日のバレンタインの日だ。それ以降は一度も顔を合わせていないし、向こう側から接触してくることもなかつた。

だから、僕は首を横に振るしかなかった。

『そうか……すまなかつたな』

そう言葉を僕に返した後、ぼそりと呟いた言葉はすっかりと僕

の耳に残った。

……つまり、今まで欠かさずにお見舞いに来ていた兄妹が来なくなった理由は別にあるというわけか

確かに、水上先生がそう呟いたのを僕は聞いた。しかし、それを直接聞いてこなかったということは僕には秘密にしたかったということだろう。

だから、僕は今までどおりに病室の花瓶に挿してある花を入れ替え、その日は帰った。

そして、現在は学校の昼休みである。

「けど……恭介さんとはかく、希実香が遠のお見舞いに来て無いつて言うのは妙だよなあ」

ぼそりと漏らすように僕は呟いていた。

「……突然どうしたんだよ」

その声を聞いていたのか、この二ヶ月の間でよく話すようになつた隣の席の住人が僕のほうを見ながら尋ねてきた。

「んー、なんでもないよ。ただ、ちょっと考え事しててね」

その、隣の席の住人の名前は佐倉悠里と言う。一年にして剣道部の中堅に入るほどの実力者であり、成績も中の上ほど。文武両道を歩んでいる人間である。しかし、天然も混ざっているために少々馬鹿っぽくも見えることが残念でたまらない。

「はあ、考え事ねえ。最近はずっと考えてんだな……それもお前の癖だっけか？」

「良くそんなこと覚えてるね……結構前に話したことだよ、それって」

そのくせ、進んで他人の厄介ごとに首を突っ込んでくるお人よしで、この前も不良に絡まれていた他校の女子生徒を助けたりしていた。

「でもな、忘れろって言う方が無理があるぜ？」

そう言って、悠里は僕に言い返す。

「何がさ」

「お前の昔話だよ……まあ、現在進行形なんだろうっけどよ。そんな時にいろいろ教えてくれただろ？」

まるで、相談しろと言っているようにも聴こえる。

「それは悠里が教えろって言ったからだろ……確かに、話したのは僕だけだよ」

「まあな。けどよ、他人に話したほうが楽になるって事もあるだろ？」

「それは相手が理解してくれるような他人だった時だけだよ……」「そんじゃ、俺には話してくれるわけだな。よし、何を考えてたのか言ってみろよ」

「どうしてそうなったのか理由を教えて欲しいよ……けど、いいか」

結論。悠里は他人の懐に入ることが秀でているのだから、どうせそのうち聞かれる……と言うよりも話すことになる。だったら、相談と言う形でも話せる相手がいることを幸運に思おう。

「実は」

「おお、そうなのか。そいつは大変だな」

「まだ何も言っただけで無いんですけどっ！？」 悠里はエスパーなのかっ！？」

話せと言われたから話そうとした結果がこれでは突っ込むしかない。むしろ、いっそのこと陥没させる勢いで咽仏に叩きつけてやる。

「まあ、そう切れの良い突込みを咽に入れないでくれ。痛いから……」

…「ちょ、痛いって!!」

「それでっ！ 何が大変なのか教えてくれないかなっ！ 僕にさ！」

「ちょ、マジでヤバイって……咽仏が陥没する!! ごめんなさい、マジで謝るから許してっ!!」

悠里の目尻に涙が滲んできたあたりで、咽仏に切れのいい突込みを入れるのを中止する。

「うう、げぼっゲホッ……はぁ、マジで咽仏が陥没するところだった」

「別に咽仏の一つや二つ陥没した所で」

「咽仏は一つしかねーよ!!」

と言う感じで、どこぞでもやってあろうコント的な何かを終える。大分脱線してしまったが、少し気が和らいでいる。

これも悠里の思惑通りだというのなら、佐倉悠里という人間の器の底が見えない。

「それで、恭介さんと希実香ちゃんがどうしたって？」

「ねえ悠里……本当に読心術とか」

そこまで言いかけたところで、悠里は鞆から取り出したであろう焼きそばパンのパッケージを開封しながら答えた。

「そんなんじゃないやねえよ。さっきボソツと呟いてただろ？ それを聞いただけだつて」

そう言つて、焼きそばパンをぱくつと口に啜える。

「さっきは咽仏を陥没させようとして悪かつたよ……」

「まあ、俺ももう少しやり方を考えればよかつただけだから言いっこなした。けど、今度は勘弁だな、アレは」

咽仏を撫でるようにさすりながら、悠里は笑つて答えた。

「悪かつたよ……それで、本題なんだけどね。いいかい？」

「もうギャグはやらないから安心してくれ。流石に学習はするから」

再び口に啜えた焼きそばパンをもごもごと咀嚼しながら、悠里はこちらに耳を傾ける。実際には鞆に手をつ込んで、別のパンを取り出しているのだが……

「それじゃ、あらためて……考え事つて言つたけど、どうも引つかかることがあつてさ」

僕が話し始めると、今度はメロンパンのパッケージを開封しながら黙っている。

「それで、絃城兄妹の事はあの時に纏めて話したから覚えてるよね？」

「恭介さんと希実香ちゃんだろ？」

「そう。恭介さんと希実香が最近お見舞いに来ていないらしいんだ」

僕がそういうと、悠里は少しの間のことと言った。

「たまたま用事が重なっただけじゃないのか？ もう高校生なんだから……土日の予定なんて個人の勝手だろ？」

確かに、それはそうだ。しかし、問題なのはそちらではない。

「恭介さんならともかく……今まで毎週欠かさずにお見舞いに来ていた希実香も一緒に来なくなっただよ」

そうなのだ。問題は兄ではなく妹が来なくなったことなのだ。あれだけ遠のことを想っていた希実香が……

「だったら、直接本人に聞きに行けばいいじゃないか。別に知らない仲じゃないだろ？」

「確かに、それは言いアイディアだと思っけどさ……何年も顔を合
わせてないって言わなかったか？」

そもそも、何年も顔を合わせてすらいない幼馴染の家に行くなん
て気が重い。

「いや、つい最近に顔を合わせたんだろ？ だったら大丈夫だろう
さ」

「うっ……」

いつの間にか食べ終えていたメロンパンのパッケージをクシヤク
シヤに丸めながら、悠里は言葉に詰まった僕にいい笑顔を向けてき
た。

何故だろうか……昔にも同じような事をしてくれた人がいた気が
する。どうか気のせいであって欲しい。

「それじゃ決まりだな。今度の土日のどっちかに絃城兄妹の家に行
くか」

「分かったよ……行くよ。行けばいいんだろ……って、もしかして
悠里もついて来るつもりなの？」

「当たり前だろ？ 相談されたんだから最後まで付き合っさ」

その物言いに若干だが違和感を覚える。何故なら『相談された』
ではなく『相談させた』の方がしっくりと来るからだ。だけど、悪

い気はしなかった。

長い間、病院で眠る親友を待っているだけの僕に、過去を知ってからも友人として接してくれる。それは今までに無かったことだから……

「ありがとう…悠里」

素直に言葉にして伝えると、悠里は即答した。

「それは全部解決してからもう一度言ってくれよ。役に立てるか分からないからな」

そう言っつて悠里は冗談めくように笑う。

「そうだね」

だから僕も笑って返した。

「それでき、俺からも頼みがあるんだけどいいか？」

「何？ 言ってみてよ」

「お前の持ってきたパンと俺の食いかけのパンを交換してくれないか？」

まじめな顔をして聞いてきたからどうしたかと思ったけど……やっぱりいつもの悠里だった。

「冗談、絶対に嫌だよ」

「えっ？ いいじゃん。別に0と1を交換しようって言うてるんじゃないよーしよ」

「だったら聞くけどさ、同じ事言われたら悠里はどう答える？」

「ふざけんな、誰がそんな食いかけと交換するかよ！！」

「はい、回答終了」

「ちえ、考え事をしてる奏龍なら交換してくれると思ったんだけどな」

そんなことをブツブツ呟きながら、悠里は食べかけのパンをもさもさと頬張るのだった。

その後の授業は赤点をとらない程度にノートをまとめるだけで終わった。そして、放課後を迎えるわけだが……

「ねえ悠里……どうして結衣ちゃんがこの会話に加わっているの？」
「なんか羽森が仲間にしてほしそうにこっちを見てたから……ついな」

どこのRPGだと突っ込みそうになるが、我慢して心を落ち着かせる。

「ついつて……まあ、別にいいけどさ。結衣ちゃんはどこまで悠里から聞いているの?」

「今神さんが今度の土日のどちらかに幼馴染みの家に入り込むと言ったところまでです」

「……全部だね」

「そうなります」

少し痛む頭を軽く手で押さえながら、悠里を睨むようにじっとりと見る。その視線に気が付いたのか悠里は、親指をグッとこちらに向けて立てていた。

その指を……折ればいいのか？

「おい、どうして俺の親指を掴んでるんだ?」

「普段は文武共に優秀な悠里君の発言と行動に疲れてね……つい」

「ついで?」

「折りたくなっちゃった」

そして、掴んだ親指を本来曲がらない方向に曲げる。

「折りたくなっちゃった」じゃねえよ!! 痛い、痛いつて!!」
「おお!! いまがみさんはこっちでもそういうキャラなんですか!」
「おい羽森!! 傍観してないで助けてくれ! ちょ、マジで痛いつて!!」

悠里の親指が軽く、パキツという音を鳴らしたあたりで手を離す。しかし、先ほどの彼女の発言に多少の違和感を覚えたのは気のせいだろうか?

「俺の親指がああああ!!」
「そうじゃなかった! だ、大丈夫ですか佐倉さん!？」

「いや、やはり気のせいだろう。彼女はいつもこんな感じだったから。」

「何だよ、軽く握っただけだろ? 大げさだなあ悠里は……」
「骨の間接から音がする時点で軽く握っただけで言いませんから!!」
「いやいや、軽く握っただけでも音くらいはするからね」

そう言っただけで僕は自分の拳を握って、空いている手でその握りこぶしを軽く締める。すると、小気味のいい音がポキポキツと鳴り響いた。

「ほら、こんな感じにさ」

「そういう音じゃなかったよ!? 『ぽき』じゃなくて『パキ』だったから!」

「うん、分かったよ。それで、今週の土日のどっちにする?」

僕がそういうと、ついさっきまで騒いでいた悠里が答える。

「くそ…: 始めからこの会話をしていればこんな目じゃなくて、俺はどっちでもいいぞ?」

そして、彼女も申し訳なさそうに言うてくる。

「あの、初めに確認するべきでしたんでしょうけど、私も参加と言う形でいいんですか?」

「あ、うん。別に大丈夫だよ」

それに対し僕は気さくに答える。

僕たち三人は、はたから見れば仲の良い三人組に見えるだろう。

実際にはお互いがどう

思っているかなんてわからないけど……客観的に観てそう見えるなら僕としては満足だ。

「そもそも、そういうお前はどっなんだよ奏龍？」

「僕？」

「そう、お前だよ。コレはお前の考え事……まあ、簡単に言つと悩みの種を解決するためのもんだ。だから、お前が決めないと意味が無いだろ？」

それを言う悠里は、先ほどまでの天然っぽい表情が消えている。だから、僕も真面目に答える。

「そうだね……土曜日だと希実香は学校があるから、日曜日がいいかな。日曜日だったら恭介さんか希実香のどっちかがいるかもしれないしさ」

僕の答えを聞くなり、悠里は彼女に向かって確認を取る。

「了解。じゃあ、日曜日で決まりだ。羽森、お前も日曜日で大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですよ。それじゃ、何処に集まりますか？」

そして、彼女の質問は僕に返ってくる。だから僕は、咄嗟に思い浮かんだ喫茶店の名前を言う。

「喫茶・こきりはどうか？ あそこだったら駅も近いし、集合には最適だともうけど……」

「こきりつて、駅前にあるちっこい喫茶店だよな？」
「多分それであってるよ。結衣ちゃんは場所分かるかな？」

僕がそう尋ねると、彼女はにっこりと笑いながら答える。

「知ってますよ。とてもいいお店ですから」
「それじゃ、日曜日の十時頃に集合でいいかな？」
「問題ない」「分かりましたよー」

それで、今日は解散となった。

悠里も彼女も僕も、家の方向がバラバラのために下校は一緒にすることはないが別に問題はない。何故なら、次の日に学校でまた会えるのだから。

しかし、幼馴染である希実香は同じ学校ではないためになかなか会うこともできない。だったら、自分から会いに行くと言う考えは悠里がいなければ思いついても、実行するまでには居たらなかったと思う。

昔から僕は、こういった友人のおかげで迷わずに歩いてこれた。昔は笹宮遼と言う親友が。現在は、佐倉悠里という友人がいてくれる。

(遼……君も早く元気になってよ。そうしたら、また僕達と一緒に)

今は眠っている親友を思いながら、僕は家に帰るのだった。

第二章・英雄 その四

六月十三日

絃城姉妹の家を訪ねるといふ話をしてから約五日が過ぎた。つまり、喫茶こきりに集まる日である日曜日になったわけだ。しかし別段とすることもなく、約束の時間になる一時間前に喫茶こきりに一人で訪れていた。

一見してみれば、喫茶こきりは寂れているようにも見える。しかし、あくまでそれは一見して見ればに過ぎないのだ。実際に店内にいると分かるのだが、実は一時間に一度は人が出入りしている。その他にも僕と同じように店内でコーヒーを飲んでいる人や、読書をしている人が数人……つまり、何が言いたいのかと言うと。

此処は知る人ぞ知る名店なのだ。

まず、良い点を上げるのならコーヒーが美味しい。聞く話によると、ウォータードリップと言う生成方法で、専用の機材を用いる水でコーヒーを抽出する方法で常連のお客さんにはコーヒーを作ってくれているらしい。一度だけだが、そのコーヒーの作り方を某サイトで検索してみたら、一杯を作るのに八時間も掛かるとか何とか……一体、どうやって作りおきをしているのかがとても気になるところだ。

次に、喫茶こきりのマスターであるお姉さん きりなみかすみ 霧咲霞さんは、昔から変わらざるとても気さくなお方であるということだ。

「あー、今神くん。べた褒めされるのは嬉しいのだがな……少し気
恥ずかしいものもあるんだ」

そして、人の心のある程度読めるらしい。小学六年の頃に、先代
のマスターが自慢げに話していたので良く覚えていたが、喫茶こき
りの現マスターである霞さんはどこその古武術の道場で免許皆伝を
渡されたらしい。その古武術の道場が特殊な武術の流派であり
名を畏神心いしんしんかん眼流と言う 人の考えを読むことに優れた武術
家であるとかなんとか。

「ちなみに、先代のマスターは私よりも人と接することに優れてい
たが……私はまだまだだよ。人の心を読む事は出来ても、癒す方法
を知らないからね」

この通り、ほぼ考えていることが筒抜けなのである。

「そのわりに恋のキューピットなんてやってましたっけ」

「今神くん……そんな昔のことを掘り起こすのはやめてくれ。アレ
は若気の至りと言うものだからね」

目を手で隠すような仕草をしながら、霞さんはそう言う。だが、
一つだけ思うことがあったのでつい喋ってしまった。

「若気の至りって……霞さんって僕と四つしか離れていませんよね

？ それ以前に、まだ高校生って言われてもおかしくないような容姿ですし」

しかし、この話題は地雷だったようだ。

「今神くん……確かに実年齢より若く見えるといわれれば悪い気はしないのだがね、私としてはもっと大人としてみてもらいたいんだ。この容姿のおかげで、私は今も昔も変わらずに友人同士の間では着せ替え人形にさせられるからな……」

「た……大変そうですね……」

「ああ……だから頼む。私に対してこの話題は振らないでくれ、お願いだ」

霞さんは僕に念を押すように言うと、カウンターの奥にある冷蔵庫からショートケーキを取り出し僕の前に静かに置いた。

「あの……なんですか……これ？」

「私の奢りだ。それと、約束の時間はそろそろじゃないのかい？注文をしてくれば、今から人数分のコーヒーを出しておくが……どうするかな？」

そう言って、霞さんはこきりの店内にある古時計を指差す。時間は九時五十分。約束の時間の十分前である。

「そうだな、今日は人数分のコーヒー代を半額にしよう。どうだい、注文するかな？」

「いや、半額とかにしてもらう必要はないですから」

「そうかい？」

「ええ、初めから頼むつもりでしたし。それに、霞さんは昔から僕たちに良くしてくれましたから」

あの頃の六人の中でも僕以外は忘れていくかも知れないが、霞さんは涼香姉さんと仲が良かった。それに、容姿から話し方、何より雰囲気も涼香姉さんと似ていた。だから、二人が入れ替わった時には誰も気がつけなかった。

だから、僕は未だに涼香姉さんと霞さんの姿が重なって見えてしまう。しかし、霞さんはそれを知っていても今までどおりに接してくれる。

この人には、返しきれないほどの恩があるのだ。

「むむ、それを理由にするのは卑怯だぞ今神くん。しかしまあ、いかな……どうやらお友達も来た様だし、そろそろ私は店の作業に戻るとするよ」

霞さんが言うと同時に、喫茶こきりのドアに付けられたチャイムがリズム良く鳴った。その後、時間差で、入店者の顔が開けられたドアから見る事ができた。

「お、ここであってたんだな」

ドアの向こうにいた相手も、僕の顔を見ることができたのか、安心したように呟いてから、真っ直ぐに僕の座っているカウンター席の隣に座った。

「おはよう、悠里。遅刻してくるかなあ……って思ってたけど、そんなこと無かったね」

「お前さ、俺のことなんだと思ってるんだよ……」

僕の言葉に悠里はショックを受けたのか、少しグダめくように呟き返す。

「そもそも、お前が来るのが早すぎるんだよ……」

「別に遅れるよりだったらさ、早く来て待ってたほうが良くないかい？ その方が相手に嫌な思いさせなくて済むしね」

「確かにそうかもな……つか、俺が遅刻する心配よりもよ、羽森のほうが遅刻しそうだぜ？」

そう言って悠里はお品書きを手にとる。

「まあ、別に良いんじゃないかな。だって、此処って見つけにくいしね」

「だったら俺も遅れてきても良かったんじゃないのかよ？」

そんなことを言いながら、お品書きに書かれたメニューを眺めている。特に『今日のオス
スメメニュー』と言う欄に書かれている『七色コーヒー』と言うところを熱心に眺めているようだ。

「それはダメ。だってさ、提案者兼発案者が遅刻ってどうだと思っ
？」

「提案者も発案者も同じようなもんだと思っけどな……まあ、質問
に答えるなら無責任に感じる」

「そういうこと。今回の計画の発案者は悠里なんだからね」

そう言うと、悠里は納得したようにうんうんと唸りながら、まっ
たく別な質問をしてきた。

「それよりさ、この『七色コーヒー』って気になるんだけどよ、頼
んでもいいか？」

「うん、全く会話の脈絡が無いね……まあ、頼みたいなら頼めばい
いんじゃないかな」

そもそも、そんな身体に悪そうなネーミングのコーヒーなんて飲
みたくないと思う。霞さんは一体、何を考えてそんなネーミングを
したのであるのか？

「あ、すみません。この『七色コーヒー』って言うのお願いします」
「『七色コーヒー』……ですね、少々お待ちください」

そんなことを思っている僕をよそに、悠里は霞さんを呼び止めて注文をしている。しかし、そのメニューを注文されたことに驚いているのか、多少戸惑ったように注文の復唱をするとカウンターの奥にあるキッチンに戻っていった。

そもそも、そんなに驚くなら初めからメニューに入れなければいいと思う。まあ、そこは霞さんの遊び心なのだろうから仕方が無いのだろうけど。

確かに、あんなネーミングのメニューは誰も注文しないと思うだろうけど

「奏龍……どうしてそんなに難しそうな顔をしてるんだよ？」

そんな僕の表情を見てか、悠里は不思議そうに尋ねてきた。

「えっ……ああ、なんでもないよ！」

「そうか？ まあ、別にいいんだけどよ」

「そう、なんでもないからさ」

「……？」

僕は悠里の、なんだよ、と言った視線から目を逸らし、手元に残

っているコーヒーを口に運ぶのだった。

それからは、彼女が来るまでに他愛の無い会話を時々会話に混ぜつつくる霞さんを交えてしていた。

ちなみに、悠里の頼んだ『七色コーヒー』だが……横から見れば普通のコーヒーと変わらない黒色をしているが、真上から見ると七色に見えるという奇怪な仕組みをしていた。霞さん曰く『企業秘密だ』などと言ってはいたが、どう考えても人体に対して良い色ではなかった。

もつとも、それを注文した悠里は、それを飲んで別世界に旅立ってしまったようである。

「ふむ、やっぱりお客に出すものではないな……これは」

そう言って、霞さんは悠里の前に置かれたコーヒーカップを回収して、キッチンの流し場に流してしまった。

「やっぱりって……分かっててメニューにした拳句、悠里に出したんですか？」

「いや、先代マスターはこれの美味しい抽出の仕方を知っていたようでね……見よう見まねで出したら失敗したというわけさ。しかし、先代マスターが言っていたことはこの事だったのか……いやはや、未恐ろしい飲み物だよ。コーヒーとはね……」

「霞さん……せめて美味しく作れるようになってからメニューに入れませんか？」

「……………善処しよう」

苦笑いをしながらそう言う霞さんの姿はいつに無く真剣だった。

約束の時間から一時間が過ぎようとした時、喫茶こきりにチャイムの音が響く。

「お、遅くなつてしまいました！」

その声と一緒に現れたのは彼女だった。

「今神くん……………君のお友達と言うのはその少年と結衣くんのことだったのか？」

そして、意外な人物であったのが霞さんが僕に尋ねてくる。そもそも、今の言いようだと彼女と霞さんは何かの接点があるのだろうか？

「結衣ちゃんつて……………霞さん、知り合いか何か」

「あ、霞ちゃん　久しぶりです、此処でまだバイトしていたんですね」

僕の発言は最後まで言い切る前に、彼女の声によって掻き消され

てしまった。

「ゆ、結衣くん…その、霞ちゃんと言うのはやめてくれないか…
なんか、こっ…恥ずかしいから」

しかし、霞さんがこうしている姿を見ると、プライベートでの関わりがある事は間違いないのだろう。

「こんにちは結衣ちゃん。取り合えず座ったらどうかかな？」
「あ、こんにちは今神さん。そうさせてもらいますね。それと…
どうして悠里さんは白目を剥いてテーブルに突っ伏しているんですか？」

不思議そうにそういいながら、彼女は椅子に腰を下ろした。

「あ、うん。…ちよつとね」
「…ちよつと、ですか？」
「はっ！…！」

そんな会話の途中に、まるで自己主張をするかのように飛び起きた悠里だったが、すぐに首を左右に動かして状況を確認し始めた。

「俺は何処で此処は誰だ!？」

そして、使い古されたネタを言い放つと、自分の言ったことが想像以上に場の雰囲気や白けさせた事に気が付いたのか黙ってしまった。

そして一言。

「なんか…こつ、ごめん」

そんな悠里の姿を見ていた、僕を含める三人は一斉に苦笑いをする。

そして思う。

そつだ、これも僕の日常なんだ。

長い間忘れていた、友人と笑いあうということ。それは、僕が過去を引きずり続けていた
という証拠だ。けど、遠のことを…昔の楽しかった日々を忘れることはしたくない。

それは、僕たちが過ごしてきた確かな思い出だから。

『俺達の時間も……こいつと一緒に止まっちゃまったんだな』

恭介さんはそう言った。けど、止まってしまったなら進めればいいだけのこと。多少の誤差があったとしても、その時計が壊れていない限り、時計の針は必ず時間を刻んでくれる。

時計の針が戻らないように、進まないということはありえないのだから。

もし、時計の針が進まないのなら、それは誰かが意思を持って時計の針を止めているということ。

僕はそう思う。希実香や恭介さんがどう思っているかはわからないけど、きっと僕と同じようにこの答えにたどり着いてくれるはずだ。僕はそう祈っている。

けど、時計の針は狂ったままに時間を刻むということもある。僕は、無意識のうちにその考えをこの時点では否定していたんだ。

第二章・英雄 その五

六月十三日 午後

「で、早速だけど今日の目的地に向かわないか？」

結局、午前中は霞さんを含めた四人で世間話などをしていたために、今日の目的である絃城家に向かうことはすっかり忘れていた……と言う状況だった。

だが、流石は提案者だけあって悠里はしっかりと目的を覚えていた。

「ああ、うん。そうだね。元々、今日はそのために此処に集まったんだし」

「で、羽森……お前は此処に残るのか？」

悠里は霞さんと楽しげに会話をしている彼女に向かって呆れながら尋ねる。

「どうしてそんなに呆れた風に聞くんですか？」

「そりゃ、呆れるだろ。なんで仕事をしている霞さんの髪結ってるんだよ？」

「？」

「ああ、まあいいか……で、どうするんだ？」

再び、彼女に確認を取る悠里。それに対して彼女は、霞さんの髪から手を離して少し考える仕草をしたかと思うと答えた。

「勿論、着いて行きますよ」

そして、答え終わると共に再び霞さんの髪を結び始めた。

「なあ、結衣くん？」

「なんですか？」

すると、先ほどまで成すがままに髪を結われていた霞さんが不思議そうに口を開いた。

「君は今神くんたちと一緒に行くのだろうか？」

「そうですね…何か？」

「……………」

「……………」

霞さんなりに必死に理解してもらおうとしているが、当の本人である彼女は全く言葉の意味を理解していない。

「今神くん…すまない」

どうやら、霞さんは諦めたようだ。僕は心の中で、大丈夫ですよ、と呟くと、霞さんは申し訳なさそうな顔をして彼女に髪を弄られるのだった。

「ま、仕方ねえかな…ありゃ」

ずっと、コーヒーを飲みながら悠里は諦めたように呟く。ちなみに今、悠里が飲んだコーヒーは霞さんのオリジナルブレンドである。ちなみに、最初に注文をした『七色コーヒー』は霞さんが流してしまったために、口直しを含めて霞さんがサービスしてくれたものだ。

「そうだね…女の子ってああいうことするの好きだからねえ」

「ほー、こういうことに慣れてるんだな」

「まあ…ね」

そう答えて、僕はコーヒーを口に含む。そして、あの頃のことを思い出す。

「わりい…事情は大方察した」

「いや、別にいいよ。思い出は思い出すことに意味があるんだしさ。」

それに、思い出を磨耗して思い出せなくなるようにするくらいならさ、こつして誰かに話したり、思い出させてもらえるほうがいい…
…僕はそう思ってるから」

僕の言葉を聞いた悠里は、ぼそりと呟くように言った。

「強いんだな…お前はさ…」

だが、その言葉は何かを含んでいるようにも聴こえた。だけど、僕にはその言葉にどんな意味があるのかを理解できない。

でも、きっと分かる日が来るはずだ。だから、僕は答える。

「そんなことないさ」

強さとは人それぞれ、千差万別だ。悠里の考えている強さと、僕の考える強さはきつと別のものだ。だから、僕には曖昧に言葉を返すことしかできない。

「いいや、お前のそれは力とは別の強さ」
「できたあー!!」
「……なんだって？」

悠里が言葉を最後まで言い切ることなく、彼女の声によって意識

が逸れてしまった。

「いや、俺が聞きたい……何があった？」

「察するに、霞さんの髪が仕上がったんだろっね」

僕と悠里はほぼ同時に横に顔を向ける。

そこにはサイドポニーに綺麗に結われた霞さんの恥ずかしそうな顔と、達成感によってか満面の笑みを浮かべている彼女の顔があった。

「い、今神くん……た、頼むから見ないでくれ……っう」

「何言ってるんです、こんなに可愛いのに！」

赤面しながら懇願してくる霞さん。そして、霞さんに頬ずりをしている彼女。

「こっつて、喫茶店だよね？」

「奏龍……この場合は見るべきか……それとも見ないべきなのか？」

「いや……まあ、本人が見るなって言ってるんだし、見ないほうがいいんじゃないのかな？」

「けどよ、あの可愛さは犯罪的だぜ？ さっきまで可愛いって言うより美しいって印象だったのに、今じゃその両方を兼ねそろえてるんだ！」

「だから？」

「見なきゃいけない使命感に狩られる！！」

そう言っつて、悠里は赤面している霞さんの顔をまじまじと直視していた。

「ねえ……今の質問に意味はあったのかい？」

そう尋ねると、悠里は振り向かないままに親指を立てて答えた。

ああ、なんてデジャヴユ。その親指…折られた
いのか？

「無い！」

瞬間、僕は悠里の親指を掴み、本来曲がってはいけない方向にゆつくりと倒す。

「ちよつ、これ！　なんてデジャヴユ！？」

「折れる」

「痛い、痛い、痛いつて！！　痛いからやめて！　マジで折れる、
今度こそ折れるって！！」

ギリギリと骨が軋んでいく感覚が手に伝わってくる。後、数ミリ動かせば悠里の親指は変な音を立てて折れるか、脱臼するだろう。

「ちよつ、何でそんなにいい笑顔なんだよ!？」

「馬鹿は死んでも治らないらしいね」

「成績は俺のほうがお前より」

寸での所で悠里の親指を解放する。

「次は首かな？」

そして、冷やかな目で悠里を見ながら脅すように呟く。

「いや、マジでゴメン。俺が悪かった」

すると、その視線に気負けたのか悠里は力なく僕に謝るのだった。

「まあ、分かればいいんだよ。分かればね」

「あかさ、絶対にお前……昔に何か習ってただろ？」

指をいたわるように手をカウンターに置くと、悠里は僕に聞いて

くる。

確かに『僕たち』は、幼い頃に一つの武術の流派の元で修行をした事はあった。

「よく分かるね。それも有段者としての感か何かなの？」

「だけど、同じ流派だというのに『僕たち』の型は一人として同じものにはならなかった。

「いや、一応だけど俺も有段者なんだぜ？ 得物が無いにしろ素人に身のこなしで負けるはずがねえだろうよ」

「そうかな？ 確かに部活動をしている時の悠里って隙が無いけどさ、普段こうやって話をしている時と違って結構隙だらけだよ？」

「まあ、常に気を張ってるわけでもないしな……それでも、素人相手になら指一本触れさせない自身はあるな」

勿論『僕たち』とは、僕と遼と恭介さんの三人のことだ。

「ちなみに、喧嘩じゃ負けたことはねえ」

流派の名を『久我峯無形流』と言う。

「今度さ、正式に手合わせでもしてみろ？」

『僕たち』の師に当たる人は、僕たち三人に呼び名をつけた。

「いや、パスだ。お前と相手したら何故かわらんけど怪我する気がしてしょうがないからな」

「冗談、僕が悠里に勝てるはずが無いよ」

静かに笑って僕は言葉を返す。

今の僕には必要の無いことだ

「ご謙遜を、奏龍殿」

それに対して、悠里も微笑しながら答えた。

「そちらこそご謙遜を、悠里殿」

だから、僕も同じように微笑をして返した。

「さて、と。俺達の会話にも一区切り付いたことだし……羽森、お前も終わったんだろ？」

それを今までの会話の区切りと見たのか、悠里は彼女に向かって話しかける。

「はい。もういつでもいける準備はしてますよ」

「りょーかい。そんじゃ奏龍、そろそろ時間も時間だし目的地に向かうとしようぜ」

そう言っつて、悠里は財布を取り出して霞さんに全員分の伝票を手渡す。霞さんはそれを受け取ると、レジに向かって歩く。

「そうだね。確かにお昼は過ぎちゃったし、これ以上話をしていたら一日が終わりそうだし」

僕が財布から自分の分のお金を取り出そうとすると悠里に止められた。

「今日は俺が奢ってやるよ」

「ありがとうございます佐倉さん」

「あれ、羽森の分も奢るって言ったっけ？」

「どうして今神さんの分は奢って私の分は奢ってくれないんですか！？」

「分かった、分かったよ。奢れば良いんだろ」

小さく溜息を吐いてから、悠里はレジの前にいる霞さんに千円札を三枚渡す。

「レシートはいるかい？」

「お願いします」

悠里は霞さんからレシートを受け取ると、それを財布の中に入れた。

「さ、奏龍。絃城家まで道案内頼むぜ」

その言葉と共に、悠里と彼女は喫茶こきりから出て行く。

「りょーかい。霞さん、また来ますね」

「ああ、いつでも来たまえ。お姉さんはいつでも相談相手になるからな」

「ありがとうございます」

「では、気をつけてな」

その言葉を背中に受けながら、僕も喫茶こきりを後にするのだった。

「あら、奏龍君じゃないの。久しぶりねえ。今日はどうしたの？」

約二年ぶりに訪れた絃城家は記憶にあったものと変わってはいない。

「あの、希美香はいますか？」

だから、昔と変わらない調子で小母さんに僕は質問することができた。

しかし、その質問をした瞬間に小母さんの表情が一変した。何故だろうか、嫌な胸騒ぎがする。

「ごめんね……希美香ったら、連絡も無しに三日も家に帰ってないの。多分、高校でできたお友達のお家にいると思うんだけど……」

あの几帳面な希実香が、家を出たきり三日も連絡を取っていない？

「なあ奏龍、一旦此処は別な場所に行って状況確認といかねえか？」

悠里も、今の一連の会話に何かしらの違和感を感じたのであろう。小母さんに聞こえない様に、小さく僕の耳元で呟いた。

「希実香って進学校に通ってるんですよね？」

「ええ、そうよ」

「ありがとうございます。それと、希実香が帰ってきたら僕が来たって伝えたいもらえますか？」

「ええ、伝えておくわ。またいつでも来てね」

僕は小母さんの言葉にぺこりとお辞儀をして、僕たち三人は絃城家を後にした。

しばらく歩いてから、完全に絃城家が見えなくなったあたりの通路で僕は提案をする。

「提案んだけどさ、こきりで話すって言うのはどうかな？」

「俺は賛成だな。羽森、お前はどうか？」

僕の提案に悠里は賛成してくれた。そして、彼女の意見を催促するように尋ねた。

「私は大丈夫ですよ。どうせ今日は暇ですからね」

悠里は彼女の答えを聞くと、決まりだな、と言った風に言う。

「そんじゃ、一旦こきりに戻りますか」

僕は提案したので勿論そのつもりである。彼女も、本当に今日は暇だったらしく頷いて僕たちに続いて歩く。

狂った時間を……狂った時計の針を元に戻すために行動をした僕だけ、この瞬間ときから狂った時計の針は動き始めた。今まで時を刻むことを止めていた、狂った時計の針が。

第二章・英雄 その六

六月一四日

午前最後の授業である古文の授業を聞き流しながら、昨日の出来事を思い返している。

『希実香が三日も家に戻っていないか……』

喫茶こきりに戻り、霞さんに希実香のことを伝えると、どこか納得したように呟かれた。その後、霞さんは悠里と彼女に聞かれないように僕の耳元で小さく囁いた。

『今神くん…いや、奏くん。明日のいつでも良いから一人で来てくれ、話がある』

その言葉に小さく頷き、その日は解散とした。解散に関しては発案者であった悠里も納得していたので問題なくできた。

しかし日が変わったと言うにもかかわらず、未だに僕は絃城の小母さんの言葉に引っかかりを覚えている。今はどうか分からないが、あの頃は几帳面でしっかり者だった希実香が何の連絡も無しに家に帰っていないということだ。

時が過ぎれば人は変わってしまうというが、本質の部分まで変わってしまうとはとてもではないが思えない。少なくとも、最後に病室で見た希実香の印象は昔と変わっていなかったように思える。

「
　　と言っわけだ。今神、次のページの三行目から読んでくれ」

だが、それはあくまで自分の主観に過ぎない。僕は希実香から見たら変わってしまったかもしれないし、変わっていないのかも知れない。だったら、どれが正解でどれが誤りであるのか判別は難しい。

「どうした今神？　今神、聞こえているか？」

多少考え込みすぎて頭が痛くなる。今まで聞こえていなかった音が耳に入ってくる。どうやら、古文の先生に当てられていたようだ。

「あ、いえ、すみません。もう一度お願いします」

「仕方ないな、次のページの三行目から読んでくれ」

「分かりました」

教科書を手に取り、指定されたページの文章をただ読み上げる。

その間も、関係のありそうなことを記憶の中から検索する。引つかかる記憶は幾つかあるが、どれも確信には至らない曖昧な記憶の群れ。

「よし、そこまでだ。次の文章は佐倉が読んでくれ。今日はこれで最後だ」

文章を読み上げていた口を閉ざし、考え事にあらためて集中しようとした。

「よし、今日の授業はここまでだ」

だが、授業が終わってしまったようで全員が席から立ち上がる。だから仕方なく合わせるように僕も立ち上がり、授業終わりの挨拶をする。

『ありがとうございます』

たったそれだけを言い終わると、昼休みになったためか一斉にクラスの大半分が教室を出て行った。

だが、悠里はいつものように自前のパンを鞆から取り出しながら僕に話しかけてきた。

「今日は一段とぼんやりしてんな」

それに対し僕は言葉を返そうとしたが、言葉に詰まってしまっ。いつものように言葉が出てこないのだ。

「重症だな……こりゃ」

「悪いね……ちょっと考え事してさ」

ようやく出てきた言葉も悪態をつくような言葉遣いである。

「いや、なに。確かに昨日のアレは気になるさ。俺も少しばかり気になって進学校にいる友人にいろいろ聞いたからな」

そう言いながら校内では使用禁止である携帯電話を取り出し、とあるメールを僕に見せ付けてきた。

「最近な、この進学校の中で流行ってるチェーンメールらしいんだが……これまた妙な内用でな」

そこには所々にスペースの入った気味の悪い内容が表示されていた。

「これが届いた生徒には不幸が起こるって評判らしい」

「別にチェーンメールなんてそんなものでしょ？ 別におかしなことでも無いと思うけどね」

僕がそう返すと、悠里は手で僕を制しながら話を続けた。

「まあ、聞けつて。これが届く奴の条件、それがまた奇妙だな」

「条件……？」

「まあ、条件って言うよりは身体的特徴だな。身長が160センチ前後で黒髪もしくは茶髪の女子に届くらしいんだ」

何故そんな、ある一定の人物を狙っているのか全く予想がつかない。

「それはまた……」

「で、それを送られてきた人物に共通して起きているのが失踪事件だ。もつとも、学校側では家出だとか言われているらしいがな」

「失踪事件……つて、悠里！」

失踪、その言葉が先ほどまでの引っかかっていた部分に更に引っかかってくる。

「まあ、落ち着けよ。この話にはまだ続きがあるんだ」

そう言っつて悠里は僕の顔の前に手を置き、話を続ける。

「条件その二、過去に不幸を持つ者。それで、俺が独自に調べてみた結果……絃城希実香の名前があった。何の目的があつて、誰がこんなことをしているのか知らないけどよ、そのうち大事になるぜ」

言い終わると同時に悠里は僕の顔の前から手を避け、もう片方の手で携帯電話をぱたりと閉じて鞆にしまった。

そして、僕に尋ねてくる。

「正直なところだが、俺はこの件から手を引いた方が良いと思う。もっとも、それはお前の意思しだいなんだけどよ……この話を聞いてお前はどっしよと思っただ？」

悠里の嘘は許さないといった風な視線に射抜かれ、どう答えるかを考える。だが、答えは一つしかないのもまた決まっていること……そう思っていた。

「幼馴染が関わっているんだ。僕は」

希実香を探し出す。そう言葉にしようとしたが声になる前に咽で詰まってしまふ。いや、本当にそれだけなのだろうか？

幼馴染だからと言う理由だけで我が身を危険に晒すようなことを僕はするだろうか？

答えは否だ。

ならば、どうしてそんなことを口走ろうとしたのだろうか？

「僕は…どうしたいんだ？」

わからない。一体、何を言おうとしていたのだろうか？

「……………ごめん。わからない……………」
「わからない…ねえ。まあ、いいか」

僕の返事を聞いた悠里は、煮え切らない答えに怒ることも無く手に持っていたパンに齧りつき、にやりと笑いながら言う。

「いつでも相談してくれや」

僕はそれに対し、ただ一言だけを述べるしかできない。

「……………ありがとう」

その言葉に悠里は笑って返すと、昼休みの終了を知らせるチャイムと同時に自分の席に戻って行った。

その後、僕は午後の授業の間も考え続ける。

悠里の教えてくれた失踪事件。流行りだしたチェーンメールと、

それが届く人の条件。そして希実香のこと。

考えれば考えるほどに意識はどんどん思考の渦に飲み込まれていく。

『今神くん…いや、奏くん。明日のいつでも良いから一人で来てくれ、話がある』

その言葉を思い出した頃には、学校の全ての授業は終わっていた。気がつけばホームルームの真っ最中だった。

「えー、それでは気をつけて帰宅するように」

担任の教師がそういうと、生徒達は一斉に立ち上がる。どうやらホームルームが終わったようだ。

「奏龍、今日は部活があるから先に帰っててくれ」

悠里は部活鞆を肩にかけながら、そう言っ教室を出て行った。

別にそう言われずとも今日は用事があるから一緒に帰る事はできないわけで……そんなことを思いながら僕は、机の横に提げている自分の鞆を手に取り教室を後にした。

向かう先は喫茶こきり。

歩く足は次第に早歩きになり、いつの間にか走っていた。

バクバクと鼓動を刻む心臓が呼吸を妨げている。呼吸も息を切らすほどに荒れている。

ああ、何をこんなに焦っているのだろうか？

(少し冷静になれよ僕……焦っても仕方ないだろ)

そう心の中で呟くと、先ほどまで早鐘のように鼓動を刻んでいた心臓が落ち着きを取り戻したかのようにゆっくりと鼓動を刻む。走っていた足も気がつけば何時もの歩く速さ々と大差のない速さに変わっていた。

(僕が焦っても仕方ないだろ。それに、焦ることはいつだってできるんだ)

精一杯、自分を落ち着かせることに神経を集中させる。

すると、荒れていた呼吸も次第に落ち着いてきた。そうだ、今は焦っている時ではないのだ。

身体も心も落ち着いたときには既に、喫茶こきりは目の前にあった。まるで、ここに来るまでの距離が自分を落ち着かせるためであったのだと……そう思わせるかのよう。

「流石に無関係ってことはないかな……」

悠里の調査結果と、これから霞さんが僕に話してくれることはきっと、何かしら関係のあることだろう。それに、あらかじめそう考えていれば慌てることも焦ることも無い。

僕は喫茶こきりの出入り口に当たる扉の前で小さく深呼吸をする。

既に何を聞いても良いように覚悟は決めた。

後は話を聞くだけだ。

自分に対して自問自答を幾らか行い、僕は喫茶こきりの扉を開き店内に入った。すると、何時ものように入店者を知らせるためのベルが、カランカランと鳴った。

店内を見回すと何時もならに三人は居る筈のお客が一人もいない。店内にいるのはマスターである霞さんと、たった今入店した僕だけだ。

「来たか……好きなところに掛けてくれ。勿論、カウンター席にだ」

つまり、霞さんはこの時間に僕がここに来ることを予想して人払いをしておいたのだろう。だが、そんなことのためにわざわざ人払いなんて事をして店の売り上げを下げても良いのだろうか。

「奏くん……そんな俗物的な考えはやめて欲しいな。それに、今日は休業中の札を扉に下げていたはずだ」

コトン、とコーヒーの入ったカップを僕の前に置きながら、霞さんは少し不機嫌そうに言う。

「僕としては勝手に心を読まれるほうが不本意ですけどね」

それに対して僕は、コーヒーをずっと口に含んで言葉を返す。

「違うない」

霞さんは僕の言葉を聞いて怒るところか、フツツと笑いながらそう返してきた。

「まあ、別に本気でそう思っているわけではないですからね」
「だろうね。そうじゃなければ簡単に思考なんて読めないさ……」
それはさておき、奏くん。君は何処まで知っているんだい？」

何が聞きたい……そう聞くのではなく『何処まで知っているのかい?』と聞いてくるあたりが霞さんらしい。

「希実香の通っている学校で不気味なチェーンメールが流行っている。そして、失踪事件の多発……ってことくらいです」

だから僕は知っていることをありのままに話す。実際には僕が調べたわけでは無いので知っているとよりかは聞いているというのが正しいのだけれど、この際は気にしないで置こう。

「では、希実香ちゃんが入っているということも知っているということの良いのかな？」

「ええ、それで良いです」

僕がそう答えると、霞さんは何かを考える仕草をする。そして考え終わったのだろう、次には口を開いていた。

「では、恭介が進学校でチェーンメールが始まったのと同時期に失踪したということは知っているか？」

「いえ……初耳です」

悠里の話を聞く限りでは、メールが届き失踪をする条件は女性であることが前提になっていた。しかし、実際にそうではないのだろうか？

「そうか……では単刀直入に言おう」

霞さんはそう言って、一瞬の間を空けてから言い放った。

「奏くん！」

繰返される思考地獄に終止符を打つかのように誰かの声と共に頬に軽い痛みと共に衝撃が奔った。その衝撃は頬に痛みと一緒に温かさを残した。それは霞さんの手だった。その手の上に自分の手を重ねるように置く。そこでようやく僕は、自分が霞さんに軽く頬を叩かれたのだと気が付いた。

「すみません……少し考え込んでしまったようです」

「全く……奏くんも遼くんも恭介も、一度考え込むと自分を見失ってしまふところは変わらないんだな」

「遼と恭介さんも……？」

「ああ、そうだよ。あの頃の君達は良い意味で似すぎていた。君たち三人は私達のために悩んで、必死に考えて、苦悩して……確かにそれは君達の良さであったさ。だがね、それが今の状況を生み出してしまった。そう」

何かを思い出すように、先ほどまで僕を見つめて話をしてくれていた霞さんはどこか別の場所を、全く違う遠い場所を見ながら口を開いた。

「あの頃の、他愛も無い口約束を果たすためにね」

そう言うってから、続けざまに霞さんは問いかけるかのように僕に言う。

「覚えているかい？ 君たち三人がそれぞれに、涼香と由岐ちゃんと希実香ちゃんに言った言葉を」

僕たち三人があの方に言った言葉とはなんだろう？

言われればきつと思い出せる。けど、きつかけが無ければ記憶は勝手に思い出したりはできない。

「実はな は

なんだ」

思い出せ。僕たちがそれぞれに言った言葉を。

「だからな は だけの

になってやる」

大事な部分が抜け落ちてしまったかのように思い出せない。

「そうか……だが、それが普通の思い出というものだ。けどな、それをずっと忘れなかった男も居たんだよ」

それから先は言わずとも分かった。恭介さん……いや、恭介だ。

遼の眠る病室で見た恭介の眼は僕を見る事はなかった。まるで僕を見ることを拒んでいたかのようにだった。

いや、それも少し違う気がする。あれは、あの場に僕がいなかつ

たというようにも思える。

『俺達の時間も……こいつと一緒に止まっちまったんだな』

だけど、その後に消え入りそうな声で「ありがとうな、奏龍」。そう言ったときだけは、僕を僕としてちゃんと見ていてくれた気もした。

考えれば考えるほどに思い出すことも、推理することも難しくなっていく。

「恭介は……わた、いや、涼香と交わした口約束を守るために行動している」

その後に霞さんは嘲笑うかのような笑みを浮かべ、小さく呟いた。

それも、酷く歪曲した形でな

その呟きは、おそらく僕以外に誰かが居たとして、呼吸音が聞こえていただけでも聞こえなかったであろう程に弱々しく、小さな呟きであった。

「……僕は、僕は、何を言ったんですか？」

いくら思い出そうとしても、泥沼に足を引きずり込まれるかのよう
に何も思い出すことができない。沈んでいくのだ。いくら思い出そ
うとしても、その、もっとも思い出したい記憶が。

「奏くん。君は誰に向かってその言葉を放ったかは覚えているかい
？」

「ええ、覚えています」

あの頃の僕は由岐ちゃんに好かれていた。いや、正確には心の拠
り所にされていた。だから僕はそれを受け入れた。そうすることで
由岐ちゃんの気持ちが増えるのならと。

「理由は？」

「僕は由岐ちゃんの支えになってあげたかった。姉兄の涼香姉さん
にも、遼にも負けなくらい由岐ちゃんが好きだったから」

だけど、実際にはそうではなかった。涼香姉さんには恭介がいて、
遼には希実香がいて……僕と由岐ちゃんは独りだった。僕は羨ま
しかった。僕に無いものがあの人達にあることが、溜まらなく羨ま
しかった。

だから、独りだった僕は由岐ちゃんに惹かれた。そして、好きに

なっていました。

「その思いも、感情も、人として何も間違っただけなんかないよ。それは人が持ち合わせる感情なのだからね」

「霞さん、はぐらかさないでください……僕はあの時になんて言ったんですか？」

僕が少し声を低くしてそういうと、霞さんは悪かったというような表情をしてから口を開いた。

「君は英雄ヒーローなんだろう？ それも、由岐ちゃんだけのな」

その言葉を聞いた瞬間、今まで泥沼の中に沈んでしまっていた記憶の欠片が光ながら現れ、今まで完成し得なかったパズルの中に組み込まれ、記憶のパズルが完成した。

「そう……だ。どうして、こんなに大切な事を忘れていたんだろう」

恭介は涼香姉さんに、遼は希実香に、そして僕は由岐ちゃんに

だけど、あの場にいたのは僕たち六人だけのはずだ。霞さんはあの場にいなかった。なのにどうしてそれを知っているのだろうか？

ふと思い浮かんだ疑問を言葉にできぬまま、僕は霞さんの目を見つめる。

「そう怪しむ事はないだろう？ 私は涼香から嬉しそうに自慢話をされただけだよ」

思い出し、懐かしむような表情で霞さんは僕に答えてくれた。

だけど僕には、その懐かしむような表情が何処と無く悲しみに包まれているような気がした。

「先ほどの話の続きだが、君はどうするつもりだい？ これからも由岐ちゃんとの約束を守り続けるために思い出を守り続ける英雄でいるか。それとも」

僕はその言葉を最後まで聞き終わる前に、遮るように答える。いや、答えと言うよりも自分の意思の宣言と言うべきか。

「僕は今を生きます。それが、由岐のためになると思っていますから」

「それが君の答えか……だがね、希実香ちゃんの英雄には君はなれないぞ？ あの時から」

これから先もずっと、希実香ちゃんの英雄は一人しかいないのだから

らね」

その言葉は僕の胸に深く突き刺さった。

けど、それでも僕は幼馴染を……いや、友達を助けたい。親友が守ってやれない今、その役目は僕が引き受ける。

例え誰も必要としていないとしても。必要ないと罵られても。

「僕はもう、大切な幼馴染を失いたくない」

それが僕にできることだから。

「そう……か、分かったよ奏くん。十七日だ」

「えっ？」

突然の日時指定に僕は若干戸惑ってしまっ。だが、霞さんはそれすらも気にせずに続ける。

「その日の十六時に墓地公園にある笹宮家の墓の前に行くといい。そこに恭介は来るはずだ」

その時、不意にカウンター越しの霞さんに僕は抱きしめられた。

「え、あの」

「奏くん……君のそれは間違いない強さだよ。私には持つことのできなかつた本当の強さだよ」

「霞さん……？」

ぼたぼたと、僕の顔に生暖かい雫が落ちてくる。僕はそれが何であるのかとすることも知っている。だから、どうしてそうなっているのかはわからないけど、顔を上げることだけはしなかった。

「すまない……すまないな奏くん。私には恭介を止めることはできない……だから、君に任せる。遠くんが居ない今、頼めるのは君だけなんだ」

震える声を無理矢理に殺したかのような声で霞さんに頼まれる。けど、僕にはその頼みを断る理由はないし、断るつもりも無い。

(けど……霞さんってやっぱり、涼香姉さんと同じ匂いがするんだよなあ)

どこか懐かしい匂いを鼻に感じながら、僕は霞さんに抱きしめられていた。

第二章・英雄 その六（後書き）

今回に限って、文章の大幅追加を致しましたのでここで報告させていただきます。

文中『その眩きは、おそらく僕以外に誰かが居たとして、呼吸音が聞こえていただけても聞こえなかったであろう程に弱々しく、小さな眩きであった。』の後ろからが、今回の修正で追加された文章です。

このような事にこの場を使ってしまいましたまことに申し訳ございませんでした。

第二章・英雄 その七

「さつきはすまなかった……つい感情が出てしまったね。ははっ、年甲斐も無く泣いてしまったよ」

霞さんはアレからしばらくしてから僕のことを抱きしめるのをやめてくれた。

別に悪い気はしていなかった。それに、誰かに抱きしめられるのは悪いことではないと思った。人の温かさを直に感じる事ができるのだから。

「いえ、僕は気にしてませんよ。それに、涼香姉さんのことも思い出すことができましたし……」

僕がそう答えると霞さんはどこか複雑そうな表情をしながら、それでいてどこか拗ねたような表情で、

「奏くん……どうせなら私のことを褒めてくれてもよかったんじゃないのかい？ どうせ私は霞の代わりと言うことが。霞さんは少し悲しいよ」

そう言って可愛らしく頬をぶくつと膨らませた。

「いや、別にそういうつもりで、いや、その」

僕はそれに対し上手く言葉を返すことができずにしどろもどろになっってしまう。

そんな僕の姿を見ていた霞さんは先ほどまでの可愛らしかった表情から一変して、いつものような軽い感じの笑い声……いや、本気で笑い声を上げたかと思うと、それを堪えながら僕に言う。

「くっ、ははは、っひ…はは、ふう。奏くん、君は本当に良い男の子に成長したよ。どうだい、私が誰か可愛い女の子を紹介してあげようか？」

「っ~~~~~!!」

僕は顔を真っ赤にしながら、声にならない声を出してから霞さんを睨みつけた。

すると霞さんは悪びれたところも見せずに僕に話しかける。

「冗談だよ、冗談。だがね、君も悪いんだよ奏くん。女の子はいつだって自分だけを見ていて欲しいものなんだ」

それは冗談めいていて、それでいて何処か真剣さが混じっていた。

「奏くん、今度は絶対に手を離してはいけないよ。手を離すとき、それは託す相手を見つけた時だけだ」

それは過去に、大切な人の傍にいたことのできなかつた自分に対する戒めの言葉。

けど、もう大丈夫だ。僕は二度と、掴んだ手を離したりなんかしない。

「良い眼だよ奏くん。もう私が話すことはない、今日は家に帰って大丈夫だ」

僕はその言葉を聞いてから、数瞬後にゆっくりと座っている席から立ち上がる。

「君は君のために頑張れ。私にはできないことだからね」

「ええ、全て終わったらまたみんなでここに来ますよ。勿論、希実香と恭介も連れてね」

「楽しみにしているよ」

霞さんのクスクスと微笑みとその言葉に無言で小さく頷き、僕は喫茶こきりを出て行く。

決意は固めた。霞さんが教えてくれた日時まではおおよそ三日ある。だから、今からでも遼の眠っている病室に足を運ぼう。そこで、眠っている遼に僕は告げるんだ。

『希実香は、遼の代わりに僕が守って見せるから』と。

その言葉は遼には聞こえていないかもしれない。けど、それでも僕は言葉にする。それは誓いの言葉だから。

今までが嘘のように心が落ち着いている。

そんな時、僕の背中に向かって声が飛んできた。

「いまがみさーん！」

何故だか分からないけど、異様に懐かしさを覚えるその呼び方に僕は反射的に振り返っていた。

「結衣ちゃん？」

「ん、なんですか？」

パタパタと腕を振ってこちらに走ってきたかと思えば、今度は急に真横に立ち止まり不思議そうな顔で僕のことを覗き込んでくる。

「え、あ、うん。別に大した事じゃないけど奇遇だなあって思っ

ね
「そうでしたか。確かに奇遇ですねえ」

その行動、及び言動……言葉遣いに若干の違和感を覚えるが、直に気にならなくなってしまった。

そういえば、結衣ちゃんってこんな話し方だったっけな

気付かぬうちに自分で納得してしまう。たったその程度の違和感であったのだろうと思い、考えることを放棄した。

「どうしたの、こんな時間に？」

ふと、思い出したというように僕は彼女に尋ねる。

「私はですねー、病院に向かっているところでした」

「病院……何処か調子でも悪いの？」

そう聞き返すと、彼女は違いますというように首を横に振ってから答える。

「お見舞いですよ。それで、いまがみさんの方こそこんな時間にごうしたんですか？」

「僕もね、友人のお見舞いに行くために病院に向かって歩いてたん

「だけど……」

「そうだったんですか、では一緒に向かいませんか？」

彼女から出された急な提案に、僕は断る理由も特に持ち合わせていなかった。首を縦に振った。

病院に向かって歩く途中、彼女はお見舞い相手のことを話してくれた。

彼女の話しを聞く限りその相手とは男の子であり、僕たちと同じ年齢らしい。そして、遠と同じくらいの時間を病室のベッドで目を覚まさぬままに過ごしているそうだ。

それを聞いて、僕の口は自然に言葉を発していた。

「その人の名前って……」

「残念ですがお話はここまでですね」

そう言って、彼女は僕の問いを封殺する。「どうして」と、その口を開こうとしたが目の前にある建物を見て納得した。

既に病院の目の前まで歩いていたらようだ。

「では今神さん。また今度」

僕の言葉を待たずに彼女は病院の中に入って行ってしまった。呆然と立っていた僕は、道の真ん中に立っているんだと言うことを思い出し、彼女を追う様に病院の中に入ったが、既に彼女の姿は無かった。

それから何時ものように看護師さんに面会の許可を取り、遼の眠る病室に足を運んだ。いつの間にか病室の扉をノックすることはなくなっていた。何故なら、幾度と無くお見舞いに来る間に返事は返ってこないと分かっているからだ。

だから今日も同じように無言のままに病室に入り、なるべく大きな音を立てないように遼の眠っているベッドの横に向かって短い病室の通路を歩く。

そして、ベッドの上を見て自分の目を疑った。

「遼」

そこには静かにベッドの上で上体を起こしている遼の姿があった。その顔は病室の窓の外に向いており、まだこちらには気が付いていない。

だが、僕が出した小さな声に気が付いたのかゆっくりと僕のほうに顔を向け、口を動かした。

「アンタ……どうして俺の名前を知っているんだ？」

その言葉に僕は言葉を失った。

第二章・英雄 その過去への入り口

「え……り、遼、嘘だろ、それなんの冗談だよ…僕のこと忘れたって言うのか？」

「嘘でも冗談じゃない……本当にお前のことなんて知らない」
「遼」

そこまで言った所で遮るように遼は口を開いた。まるで、人違いではないのかと言うような口調で、僕に向かって言ったのだ。その時の僕の表情はきつと、絶望が何かに染まっていたのである。

そんな僕の表情を見てか、遼は僕に笑いながら言う。

「まあ、さっきの言い方が悪かったな。けどな、本当に何も覚えていないのは本当だ。俺の主治医って名乗っていた水上先生が言うには一時的な記憶の混乱、記憶障害らしい。要するに一時的な記憶喪失ってやつだ」

その説明をする遼の表情は、昔から何一つ変わっていない…いや、変わったところもあるが、それは肉体的にやせ細ってしまっていると言っところだけだ。

それを聞いて、僕はどんな表情をしているのだろうか？ 先ほどと変わって、きつと間抜けな表情をしているに違いない。

「へえ…水上先生の言ってたこともなかなか射てるな。お前さ、今神奏龍だろ？」

「え、そうだけど……」

僕がそう答えると遼は「やっぱりな」という表情を浮かべたまま続ける。

「確かに、俺の親友だったって言われても違和感がねえよ。なあ、奏龍って呼んでも良いか？」

その問いに僕は即答をしていた。

「ああ、勿論だよ」

確かに、記憶喪失と言うことは辛いことではある。しかし、失ったという事は確かに事実ではあるが、自ら望んで失ってしまったという事実は何処にも存在しない。

「そうか……ありがとうな奏龍」

その言葉とは別に遼の表情は曇っていた。僕はそれに気付いてし

まった。けど、それを尋ねようとは思わなかった。

それを聞いてしまえば、何かが壊れてしまう気がしたから。

だから僕はそれを聞かずに、当初の目的を思い出したかのように口を開いていた。

「遼、僕からも一つ言っておいて良いかな？」

僕の突然の言葉に、遼は若干だが戸惑いながらも首を縦に振った。それを見て、僕は言った。

「今の遼にはわからないかもしれない……けど、大事な事なんだ」

そう言って、僕は言葉を纏める。

「希実香は、遼の代わりに僕が守って見せるから……だから、その時はみんなで昔みたいに」

「きみ……か……？」

僕が最後まで言葉を言い切る前に、突然、遼は自分の額に掌を当てて痛みに耐えるような表情をする。

「ちよ、遼、だいじよ」

そして、凍りつくような冷たい声で言い放った。

「悪い……帰ってくれ……一人に、なりたいんだ」

「遼……」

「帰ってくれ！」

その表情は何処か辛そうで、苦しそうで、そして悲しそうであった。

僕はそんな遼の顔を見て、何も言えずに病室を後にした。

かつて、自分の親友であったと説明された少年、今神奏龍が完全に病室を出て行ったことを確認してから、正確に言うのならば追いついたという表現が正しいのだろう。遼は小さく溜息を付い

た。

「何やってるんだろうな……俺は」

それは後悔であったのかもしれない。きみか、それはイントネーションからすれば人の名前だろうということは直に分かった。だが、遼にはどうしてそれが人の名前で、女の子の名前であるということが勝手に認識したのかと言うことが理解できなかった。

そして混乱してしまった。

激情に流されるままに、記憶を失った自分に対しても過去と同じように接している親友に厳しく当たってしまったこと。それを考え直すと、やはり自分の心に芽生えたものは後悔であったということ。遼は再確認することができた。

そして、辛く当たってしまった原因である名前だと思われるものを呟く。

「きみか……どういった感じを当てた名前なんだろうなあ」

それを考えると、初めから自分の頭の中に存在していたといわんばかりに、すつと、漢字が浮かんできた。

希望の『希』に、実りの『実』、そして、香りの『香』で『希実香』。

「記憶障害…ねえ。名前はしっかりと覚えてるんだけどなあ……これが苗字になった途端、急にぼやけるんだ」

遼が真つ先に、頭の中に残っていた苗字らしきものは二つあった。一つは『笹宮』、そしてもう一つが『久我峯』だった。

『笹宮』これはつい最近まで呼ばれていた感覚が、なんとなくだ。が脳内に残っている。だが『久我峯』と言う苗字は、長い間呼ばれていない感覚があるにも関わらず、何故か鮮明に脳内に一つの単語として浮き上がってくる。

俺は、一体誰なんだ？

水上先生は遼に向かって『笹宮遼』と呼んだ。しかし、本当に目を覚ました当初は『久我峯』だと、遼は水上先生に向かって言った。

だが、目を覚ましてからの数時間の間にその言葉すらもあやふやなものになってしまった。奏龍は遼に向かって『遼』と言う名前を呼んではいたが、苗字を一言も喋っては居ない。

そこで、遼は一つの不安を覚えた。

もしかしたら俺は、今神奏龍や水上先生の言う『遼』と言う人間とは違う人間ではないのか？

だが、たった数時間と言う時間を考えることに使った遼だったが、結局のところ何一つとして答えといえるものには辿り着いてはいな

かった。

今からでも、少しでも考えることに、記憶を取り戻すために時間を使おうと思っていた遠だったが、病室の前にある一つの気配……と呼べるのか分からない物に気を取られ、迎え入れるかのように口を開いた。

「どうした……入ってこないのか？」

言うが早かったか、それとも影が遠の前に現れるのかわからないほどのタイミングで、病室の前に感知していた反応が遠の目の前に現れた。

その姿は少女のものをしていた。

「分っていましたか……やはり、何度繰返しても『感知』をされているというのは妙な感覚ですね。ささ……いや、今はどちらの遠さんですか？」

その少女は身長が160センチ程で、茶色をした長髪のアトヘアーと言う何処にでもいるような容姿の少女であった。

「お前……どこかで……そうか……知ってる、いや……記憶しているのか？」

だが、記憶を一時的にだが失ってしまったている遼に記憶を探るということはできない。出来る事は、強い違和感を感じる程度のことだ。

だということにも拘らず、遼には確信に近い自信があった。それは、本来ありえないはずの記

憶である。親友の顔を見ても何も思い出せず、『きみか』と言う名前を聞いても何かを思い出せそうで思い出せないという形で終わってしまったということにも拘らず、少女の顔を見ただけで覚えていると記憶していると確かに脳が告げているのだ。

「そうでしょうね。例え既存の記憶を一時敵にしようが失ってしまったとしても、今までの永い眠りの間に見てきたもう一つの世界の記憶は、新しく記憶として刻まれ続けますから」

遼の言葉に少女は、答えを求められてすらいない疑問に丁寧に答える。

「それが例え、夢と言う形で見てきた記憶だとしてもです」
「夢………?」

そして、遼もまた何の疑問も感じぬままに少女の言葉を聞き入れている。まるで、旧知の友のような感覚のままに。

「そうです、全てのセカイは繋がっているんです。とあるセカイは永遠に遼さんが目を覚まさなかった。また、あるセカイでは『あの頃』の六人が今神さんを除き全員死んでしまった……そして、このセカイの遼さんは記憶を失ってしまった。けど、意識を取り戻している。これは、今までのセカイでは在り得なかった」

そこまで聞いたところで、遼の頭の中には一つの言葉が浮き上がってきた。まるで、今までに何度も何度も聞いてきた言葉のように口から漏れるように呟いていた。

「デウスエクスマキナ………」

そして、その言葉に反応するかのように少女は言葉を紡ぐ。

「そう、私は……いえ、機械仕掛けの神は　デウスエクスマキナは在るべきセカイを望んでいる。今度こそ失敗しないでください」

る
限
り
の
言
葉
で
す
こ
れ
が
、
今
の
私
に
言
え
る
で
き

第三章・記憶 その一（前書き）

1985年 墓地公園

墓地公園の直そばにある海から波の音だけが静かに響いている。波の音以外が聴こえて来ないほどに墓地公園は静かであった。

そんな墓地公園で、一つの墓石の前で一人涙を流している少年が居た。墓石に刻まれている文字は所々が欠けてしまっていて良く見なければ読み取れないような状況になっている。

そんな墓石の前で、少年は声を殺して涙を流している。目を真っ赤に腫らし、目の下には黒く濃い隈ができている。まるで、何日も前からそこで泣き続けているかのように。

『おい、ボウズ』

そんな少年に、声をかけた人物が居た。

『どうして声を出してなかねえんだ。辛いだろ、苦しいんだろ？』

少年はそれに小さな声で答えた。

泣いても、家族は帰ってこないから

『くだらねえよ』

その言葉を聞いて、少年は泣きすぎて充血してしまっている眼で

話しかけてきていた人物を睨みつける。

何も知らないくせに……俺の辛さなんて分らなく癖に！

『知らねえさ。けどな、帰ってこないって分ってんだっただら少しでも自分を救ってやれよ。助けてやれよ。お前は生き残ったんだろ？ だったら自分を大事にしろよ』

その時、少年は声の主の顔を初めて眼にした。

そこにあつた顔は、何故か泣いているように見えた。

だから、少年は尋ねていた。

おじさん、どうしてそんな顔してるんだよ？

『さあ、どうしてだろうな』

そういうと、少年に向かってその大きな掌を差し伸べた。

『なあ、行く場所がねえなら俺の所にこねえか？ 俺がお前の居場所を作ってやるからよ』

少年はその差し伸べられた大きな掌を掴まずには居られなかった。久しく見る、人の温かさがそこにはあつたから。

『ボウズ、お前の名前は？』

恭介

1989年 路地裏

セカイはこんなに理不尽なものだったのか。親に捨てられ、性を無くし、生きることすらも億劫になるほどの絶望を知り、孤独を知った。そして、涙は枯れてしまったと思った。それでも、死ぬことは怖かった。

だから、彼は生きることが諦めなかった。どんなに醜くても、必死になってただただ生きることが望んだ。初めの一週間は死ぬほど辛かった。食べるものも無く残飯を漁り、寒さに凍え、毎日が死と隣り合わせの生活だった。

その時に、心が死んでいなかったことをこれほど嬉しく思ったことはない。

『これはまた、随分と………』

けど、そんな生活を終わらせてくれた人がいた。

『お前、捨てられたのか？』

男の人か女の人かが微妙なラインの声だったが、言葉遣いから男の人だと悟った。

その声に、彼は首をこくりと縦に下ろした。

『そうか、そりゃ辛かっただろうな。けど、安心しろ。今日から俺がお前の親になってやる。どうだ、嬉しいだろ』

その言葉を聞いた瞬間、彼は声の主の胸元でわんわん泣き出した。今まで溜まっていた寂しさを、孤独を、その辛さを……彼は嬉しかった、救われたと思った。

『よしよし……今まで辛かっただろうな。お前、名前はなんていうんだ？』

彼はその恩を、その記憶を生涯大切にしようとして幼い心に誓ったのだった。

『……遼』

第三章・記憶 その一

1992年 久我峯孤児院

「無形と言っても型がねえんじゃねえって言てんだろっ！」

そう叫ぶは、久我峯無形流の指導者が久我峯くがみね桐生きりゆうである。

「身体の軸をブレさせるな、呼吸を整えろ、相手の動きを見誤るな、相手から一瞬でも目を逸らすな！」

遼はその言葉に無言で頷き、組み手をしている桐生を射抜くような視線で見据える。

「場の空気を支配しろ、相手の気配を飲み込め、相手の呼吸を感じろ」

言われていること、それは武術家にとってどれも基本的な事……らしい。

「それで良い。だがな、お前が俺を飲み込もうなんざ十年は早えな」「っ!？」

その瞬間、遼と桐生の視線が重なる。ほぼ、それと同時にだった。

金縛りにあったかのように遼の身体が動かなくなり、桐生から視線を外す事ができなくなる。

桐生の足がゆらりと揺れたかと思うと、次の瞬間に遼は綺麗に投げ飛ばされていた。

「ぐえっ」

投げ飛ばされ、床に強く叩きつけられるように落ちた遼は、蛙がつぶれた時のような声が自然に漏らした。

「今のが『抜け』と『入り』だ。後は相手を『点』に見立てて『円』を描くように身体を動かすんだ。するとアラ不思議、今のお前みたいに綺麗に投げ飛ばされる。どうだ、面白いだろ」

桐生は言い終わるなり、床に寝ている遼を肩に担ぎ上げるとげらげらと笑った。

「ま、俺くらいになればあの状態から壁を足場にして着地するなんて朝飯前だけだよ」

「先生…苦しい……………」

そういわれて、桐生は肩に担いでいた遼の顔を見る。そこには首を支点に身体をぶらぶらと吊らしている遼の真っ青になった顔があった。

つまり、桐生が担いでいたと思い込んでいた遼の身体は、実のところ担がれてはおらずに首吊り状態であったということだ。

「お、ついすっかりしちまったぜ」

そう言っつて、道場の縁側まで来たところで桐生は遼の身体をゆっくりと床に下ろした。

「先生のうっかりは人を殺すぜ？」

道場のにあたる場所に生えている木の上から陽気な声が聞こえてくる。桐生は苦笑いをしながら、声のほうに向かって呟くように言う。

「馬鹿は高いところがなんとやら……か」

「あつ、先生、今俺のこと馬鹿つて遠まわしに言っただろっ!？」

「ほれ、そんだけ元気があるなら手合わせでもするぞ。一度くらい勝つて……一撃くらい入れてみるよ恭介」

「何で言い直したんだよ!? 分ったよ、今日こそ絶対に勝つてやるからな。勝負だ先生!!」

猫のような仕草で木の上から飛び降り、恭介は桐生が戻っていった道場に走っていく。遼はそれを見て思うのだ。

先生に拾われて良かったと。

あの時に生きることが諦めなくてよかったと。

自然に、遼は笑顔になっていた。縁側の床に座って、道場で桐生に勝負を挑んでいる兄弟子である恭介を眺め、そして、その相手を務めている桐生を眺める。

「ん、なんだ。お前も混ぜりたいのかよ……そうさなあ、お前等二人まとめて相手にしてやる。お前もこっち来いや」
「その余裕なくしてやるっ　　って、のわっ！」

桐生は無駄の無い円運動で流れるように技を入れようとしてきた恭介を受け流し、そして軽く壁に向かって投げる。

恭介は壁を足場にして何とか着地し、再び桐生のことを射抜くような視線で見据える。

「ほれ、早くこっちにこねーと恭介がリタイヤすっぞ」
「遼っ、今日こそ先生に勝つぞ！」

遼は二人の声にくくりと頷き、桐生の後ろに滑り込むように回り込み、腰をゆっくりと下ろして構える。

「おりよ、遼……お前にしちゃ随分とまあ。けどな、後ろを取ったからって必ずしも有利になるわけじゃねえってこと教えてやるよ」

桐生は今まで構えてすらいなかった状態から、ゆっくりと腰をおろして構えの状態に移る。

そこからは一方的な試合になった。いや、大人と子供の遊び状態になっていた。

前方からは恭介が左右にステップを踏みながら桐生に飛び掛るが、桐生はそれを半身ずらしただけで回避し、背中を軽く押す。そのせいで後ろから追い込むように攻めようとした遼に恭介が体当たりをする形で飛び込み、あっけなく二人が床に倒れる。

桐生は軽く飛び上がったかと思うと、真横にあった壁を蹴って急加速をし、床に倒れている恭介と遼の襟首を掴み肩に担ぎ上げる。

恭介と遼はそれで敗北したのだということに自覚する。

「ちょ、ああもう……また負けちゃったよ」

「先生大人気ないよ……少しくらい手加減してくれてもいいじゃないか」

遼の言葉を聞いた桐生は、少し馬鹿にしたように笑いながら答える。

「別に手加減してやっても良いけどよ……それじゃお前等も納得しないだろ？」

けらけらと、それでいて真面目で、そして何処までも陽気な人間。それが恭介と遼が思っている桐生の間人像である。

「ちえー、今度こそ絶対に勝つてやるからな」

「いつか、俺も絶対に先生に勝つてやるからな」

「おう、いつでも掛かって来い」

満面の笑みを浮かべながら、桐生は恭介と遼の頭をわっしわっしと撫でる。

その大きな掌はゴツゴツとしていたが、恭介も遼も嫌な顔をするどころか何処か嬉しそうである。まるで兄弟のような二人を見て、桐生も安心したように微笑むのだ。

「む、そろそろ時間か……恭介、遼。今日の稽古はここまでだ」

桐生は道場の壁に掛かっている掛け時計を見て、まるで今思い出したというように言う。

「え、先生が時間云々を喋ってるって事はさ、また増えるのか？」
「いいや、今回は違うぞ。今回はなあ……知りたいか？」

意地の悪そうな笑みを浮かべ、桐生は恭介と遼に尋ねる。

「知りたいかって聞かれると聞きたくなるじゃんかよ」

「先生、今日は何があるの？」

恭介と遼は特に考えるわけでもなく、桐生に遠回しにだが教える
と言った風に答える。

すると桐生は、その言葉を待っていたというように口を開く。

「そこまで言うなら教えてやる。実はな、今日は新しい門下生の親
御さんが来るんだよ」

そう言って桐生は嬉しそうな顔をする。

「門下生って……へえ、この道場に新しく人が入るのか。なあ、先
生？」

それに対し、恭介は不思議に思ったことがあったのか桐生に対して聞き返す。

「なんだ、恭介？」

「それって何人来るんだ？」

恭介の言葉に、遼も便乗するように桐生に尋ねる。

「先生、俺もそれは気になったんだけど……」

二人の疑問を聞いた桐生は、ニヤリと口元を歪めてから言葉を放つ。

「二人だ。二人もこの道場に仲間が増えるんだぜ」

「二人……か。まあ、二人でも居ないよりだったら居た方がスズメの涙ほどでも月収は増えるからいいかあ」

恭介は桐生の言葉にそう呟くと、遼も、そうだな、と言ったようにうんうんと頷く。

だが、桐生は聞いて二人の頭を少し強めに、ぐりぐりと撫でる

「恭介、遼。お前等はそんなこと気にしないで良いんだよ。俺はお

前等が幸せになればそれで良いんだ。今も十分に楽しいしな」

そういい終わると、二人の頭の上に乗せていた掌を戻し、桐生の執務室のあるほうに向かって桐生は歩いていく。

恭介と遼は、その後ろ姿を見ながらお互いに呟く。

「俺達って…先生に拾われてなかったらどうなってたんだろうな
あ」

今の現状を幸せだと、幸福だと思う二人はそれ以上何も呟くことは無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8338v/>

デウス・エクス・マキナは必要ない

2011年10月12日10時58分発行